自讃歌註

宗祇繪抄

上卷

完

京
193

東京圖書館
京
七 架
一九三 号
一 冊

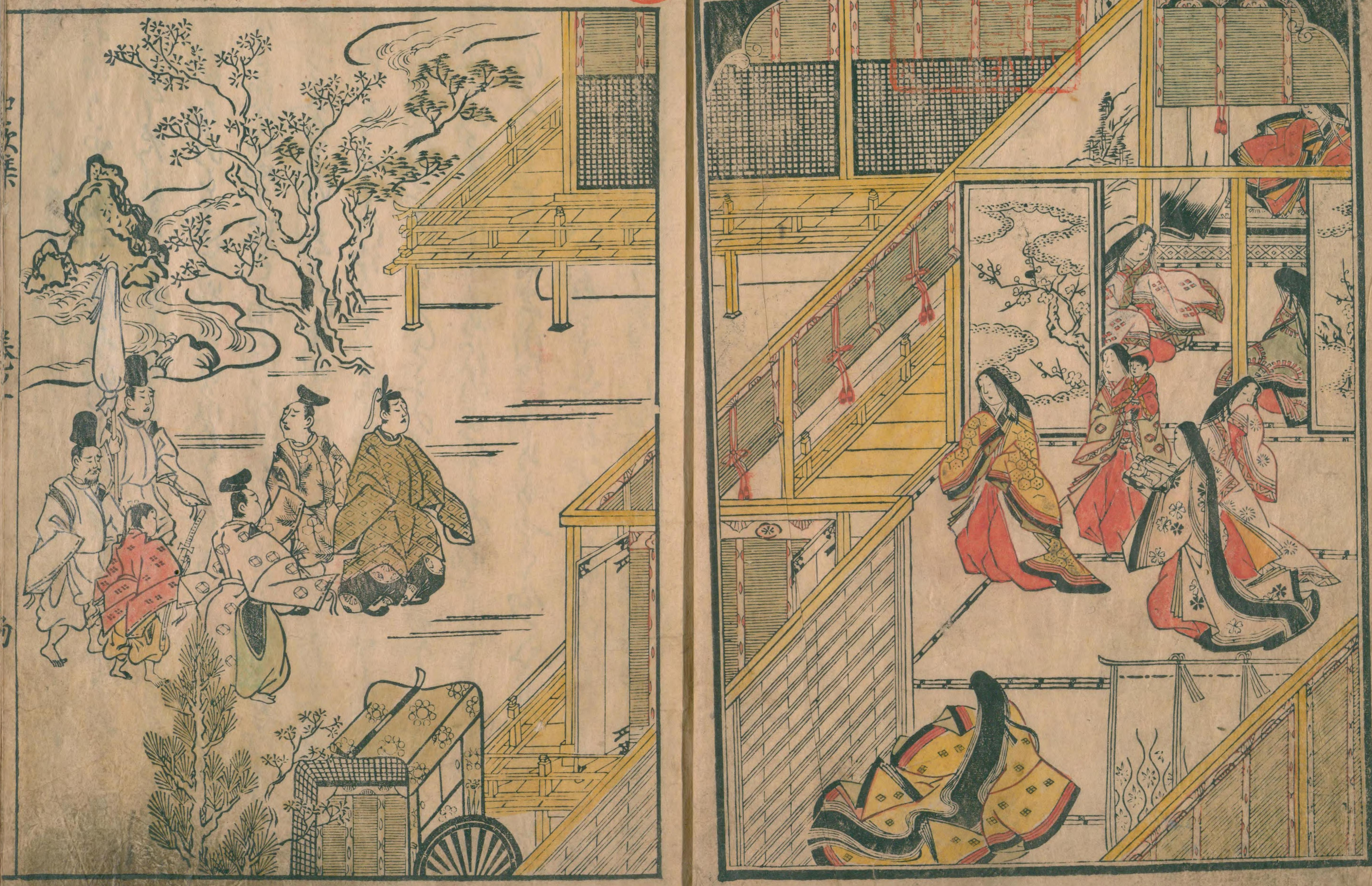
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『自讃歌注 : 宗祇繪抄』 請求記号 京-193

ガラス使用

№215967

東京書籍館



ガラス使用

天下のどかにめぐみあまねき家の志づかなる歌まさしく代々の御宇にもなりとせ
おさまりぬやよみ人よろづのことをもて給へばえられさうし海
てしまし給ひきみ中にてや侍らむ代々の歌には代々の心さしをとらへ
うたのよのまことをと思ひおほけなくも此の道を侍るや世にたぐひなく
かくてしばしやなほも富士の歌れなるみちにひかれまさるびるさう海
此ふるき心をのこしひきいれしこのみちの中に給ふより先のためにか給へ
さ侍りおよびふたゝび行きまり志らぬ人の人にあれ世ことへのあはややおもの
くらい此ぬをのこおもひくたのさ海志てぬもおろかなりきくとおし
られおもふあるを志るめ後のよれらみあらそこゝにもあるまでの花
おほよそ十首に侍りて海流めもなくしんくと力になくひけり
にはとこれ山人のあはれてまへつる海とのれて進じて恐
ようけうすゝれまめすゝん話をとゝきもしく心のこおかれまう

にわら風をけ川のそれみを志て世をもひろそにもめくての
かうしもあ清の代れ侮ともとあらくあんてきりその中にさてく咲
やをも山ざり此頭よりそしめて敷きて今ぞよまむのこのそ
まそてうちこ此山の月けまさくも人のさて行みそしめ祢のこゝろや
あこむしんのをとうろみむしろありく神のへかえく海そそすな
その祢れとちさ海出府神代乃月けまのくさきる乃葛波志にわふ
及びにあつ奴にあそこ山おふて鏡より出て月をけ御袖抒を蝶の
裏以つ道をさ海とにあすけ猿む思ひ墨のちかりまのたく
き此猿の面をしひ志てあけのひきさ猿な朝日けにて尧
もち川しくいとそのこころにわしてとうくらんもけなきのびきうに
こうちそれさのれ雪のうちひて夕されるとうさ猿のあしきや
代は侮されぬあわれたまみちさてる御代のかひありてはなれ

ガラス使用

ねこしかうりきんさてもうすとゆふくれぬまでや志みれなかの末さおもしろく月みつゝにたゞみれ風いふかんゆふきのことすにた夜はさうのかかひ海さのさにさりさらのかりつ夕くれのえおもあされねるに志かるにちかころはすゑの世の風けい海くもおもひのこされぬことなる子所と満去のあり所にてえんなるおもむきありぬ海ことはにむ志ざへおさ海ねりまりこのかつは宣もどこの花までとうてふ紀こゝのことありきりその中によりさふてあるはうりてませ後ひく河代あ同のかあまぜに入させあひくら志つあまなうつうれえうひらひるにちて花えうにのひるまだやいとんゆにありひきらうへの義よりきのりのものもちきこれありあれうことうちきんていとちろくそのはと見えりそうらひをこけよろうこれん海よにさこも人のひ身とあらせられとへむ

ぬこ海のゆあふそこもありひあつゝせらりきつそもく和哥なかうあかこうちらえあとらつま志くさてり姫さいうさ海くやとなめそうのさのみこはいかを風へさ志しうく志く世中にいさといまうりのこれつ心さうとこのそにおそせり人あつく毎すありふくみぶりつうじにありまりこのかくにくもきりへそあふ家ふへさ海の事にん人そにうのられとのことにめくあかりめまはちくぞ尓のま河のそれまれなあひろうあつうしき心よ志こあうあ寿りにそのすうふ後つく深宗のうち花りそ行そひらくよろそれ弁さまりとりまれ待りあらにうそ

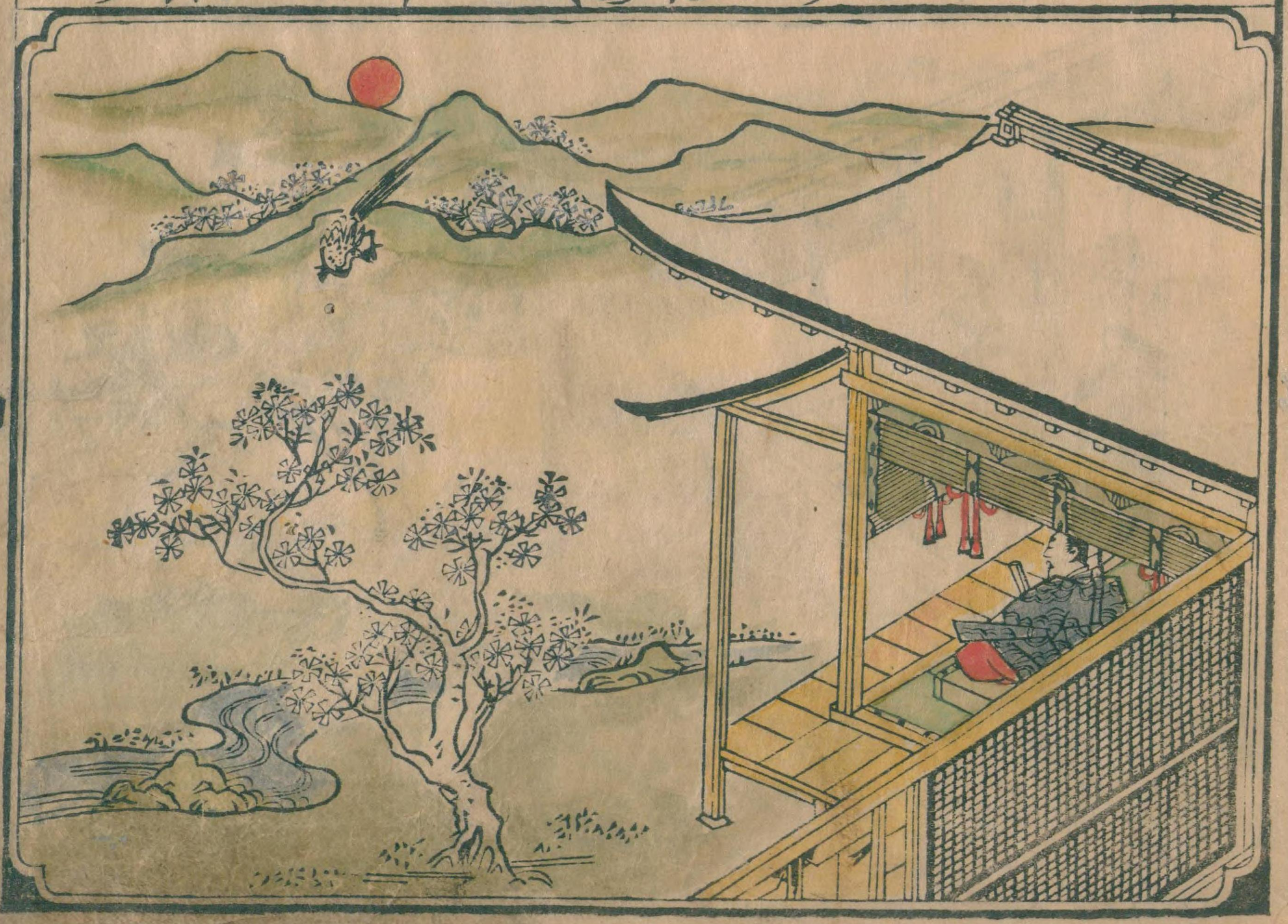
太上天皇（だいじやうてんわう）

さくらさくとを山鳥のしだりをの
なかゝゝし日もあかぬ色かな

[illegible]にはさくらさくとを山とりのと[illegible]ひりしる人丸の哥に[illegible]山鳥のしだりをのなかゝゝし夜（よ）を[illegible]ねんとあるをとりてあそばせりさるよりてうけしたゝくもそへてさておもしろきかやうなりものゝあはれしといふなるべしまさんふうれさ風見えさりけるやたゞ毎（まいしゆ）さくらや[illegible]のおもひやらるゝとよくいひとつけゝるなんきこゆるにこそ

（一句）霧ふる袖にのありふほどさえそ女く
うすの寸秋（あき）乃すゝひのはるゝ祢く

ほゝさうそうとくいふ添さらてえがれかやたく心を秋のすゝきのうゐこのおもふときいさ袖かゝやうにあらさるにこそとおもひてまさのおもむきとおもうゝさうるけくよう[illegible]なり

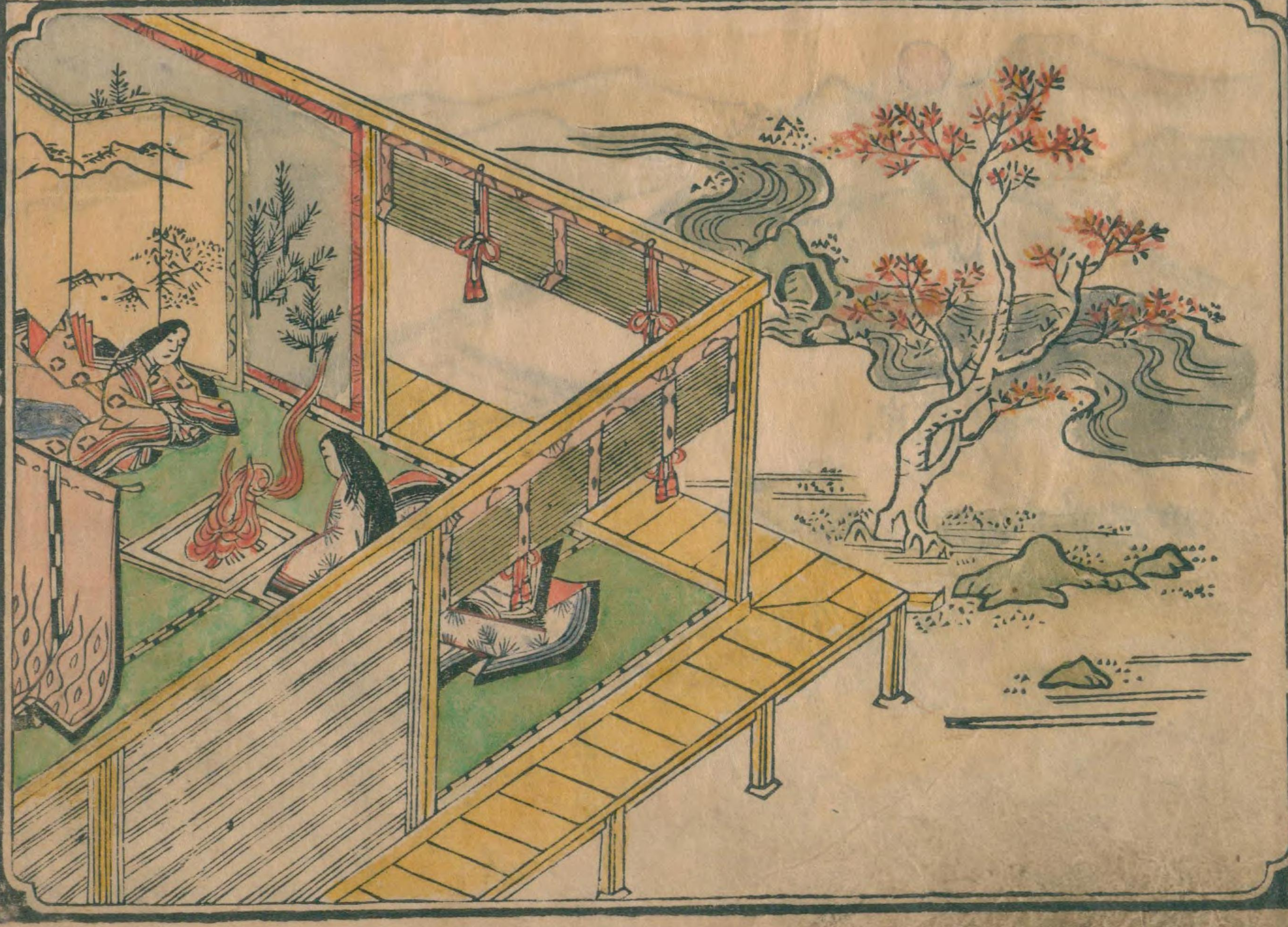


おりにあひておりしも山里ハ夕暮ぞあり
むかしはまれにことわりつゝに

ひやくたいハことくに人さするれそれも
かくことおりへいりきよふやさのこいば
京極摂政せそは慈鎮和尚にあり
かさ侍くおそてあり所にさいにいれ
とくへやもをおりひ出りこれよてのなかり
とみてよりこ侍りさいに通光の妹
なりしの云に　おりひ出のおりしも山家とさく
つにてひとつまたる夕ぐりの心ありとあり

ちよきゝ人のかはこれかをめや志かりん
ゆふへの為にたけ見えし詠と

これは有為無常といへるによりなりなぞ
この為なりしめく秋のころを志らぬ時
なれは人のかなこゝの心ろへ心を志らるゝん
夕暮あまそのことおもひの見えて見えまもとえ
あはれなる人とうすこれいふ心あり

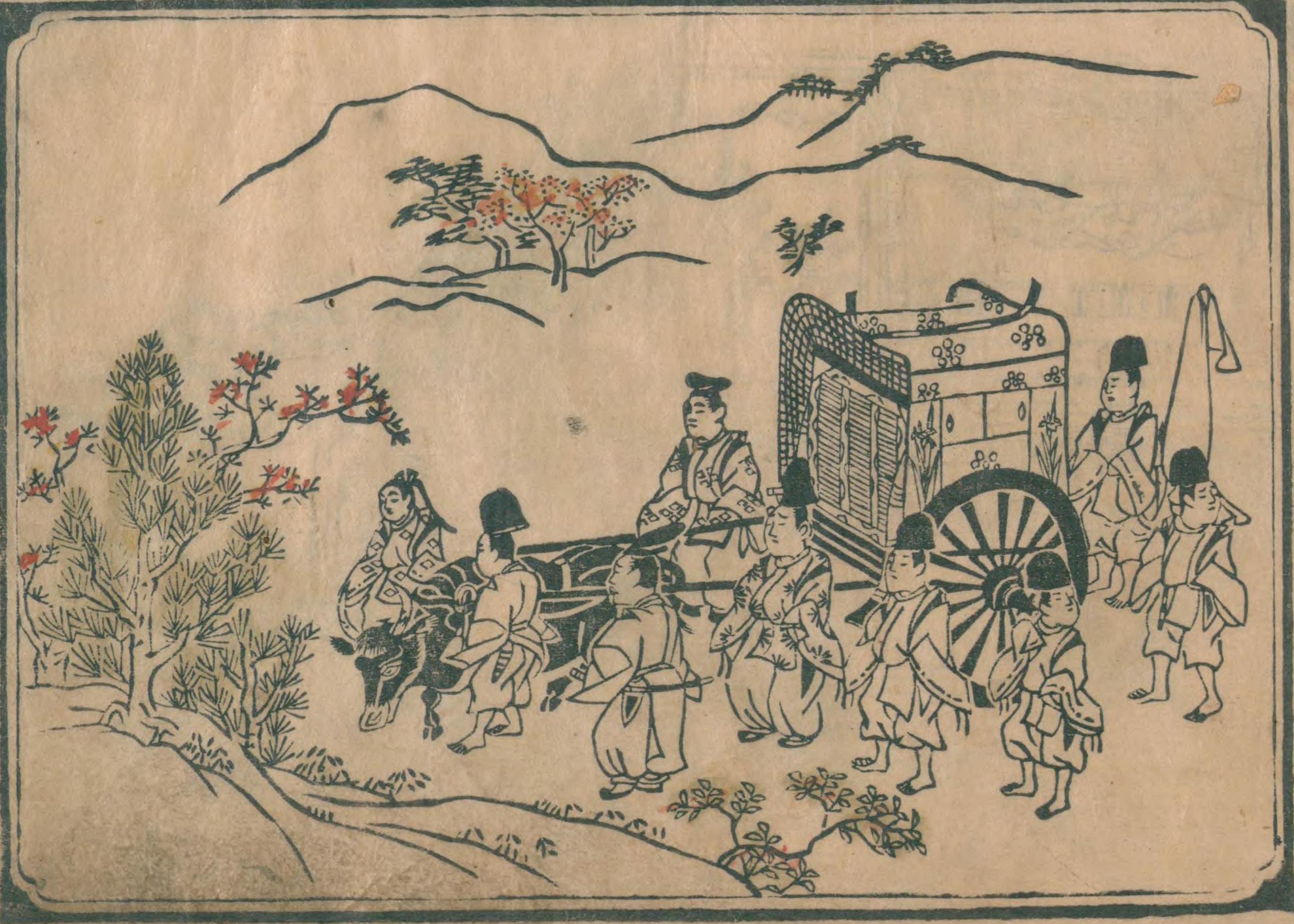


み山には嵐はげしくなるなり
みやこもいまや夜さむなるらん

これは院の御ひとく夜好人京り侍くよう
こ海へりの深山よさうも見ゆくこあれ
山嵐わくてようするむうらよやそ時
夜京りのすみゆしさおりてれこや
ゆよきむおり出て侍んこの京あとし
こひのことぞ侍こ京は心こそし侍ハ
らにくしくんせハうひろとよりとよ人さ
よこそ

ゆふ暮は海さ見ゆ夕霧ありけり何哉
ぬかりも神のためにいそぐめや

これは身ぐるしのひたれ夜乃ころ
すりきて見めくも涙くとまるさる
さりかりされるあとにうつらしとゆき
すなりとの序あり

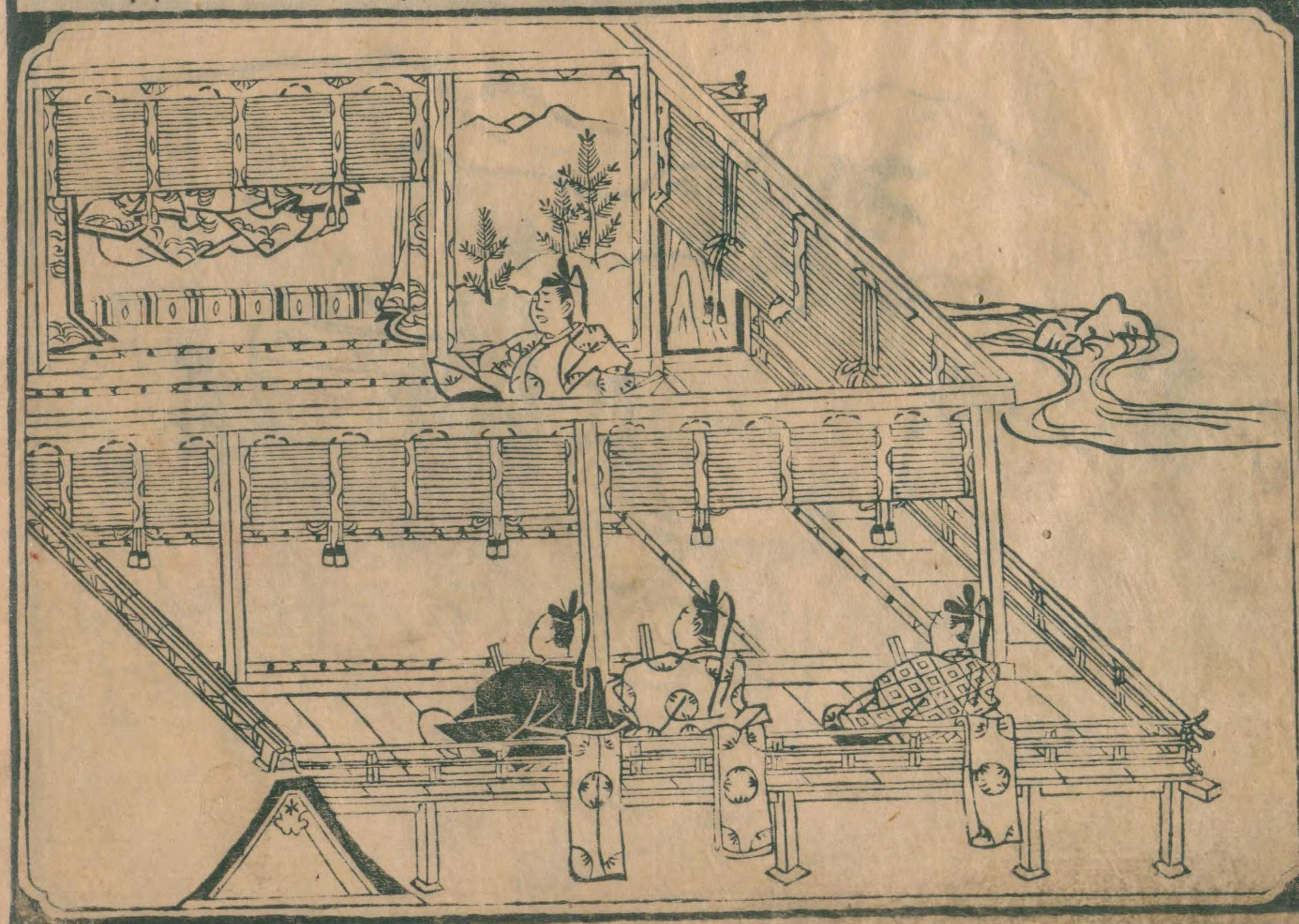


神のあしゆふかけてそ清くとも
道ハありけりうけさせまし

こゝろハ人の心清けれハかならすうけさせ給ふへし神ハ正直の頭にやとり給ふ又正直ハ被露之頭に宿りまします也
なきよしなり

あかつきの程ちかけれハひかりそへ
月日とゝけよゆくすゑの空

わかそこにちかひありしひのゝちハみよりのれ
らつゐにおもひのまゝ侍らんためにとくく大
そうにちかひしハその宝祚(ほうそ)をたもたれんとね
かひありしひかりそへとやせんくやわんと
ゝろよりちかひまもりたまへといふへきを
かへつてそれにおもひよはらちらえてすれと
いふされたるのちにありて月日とゝけよ
といひしといふこともこのえんなり又ハ
たのめるのやすからんかし

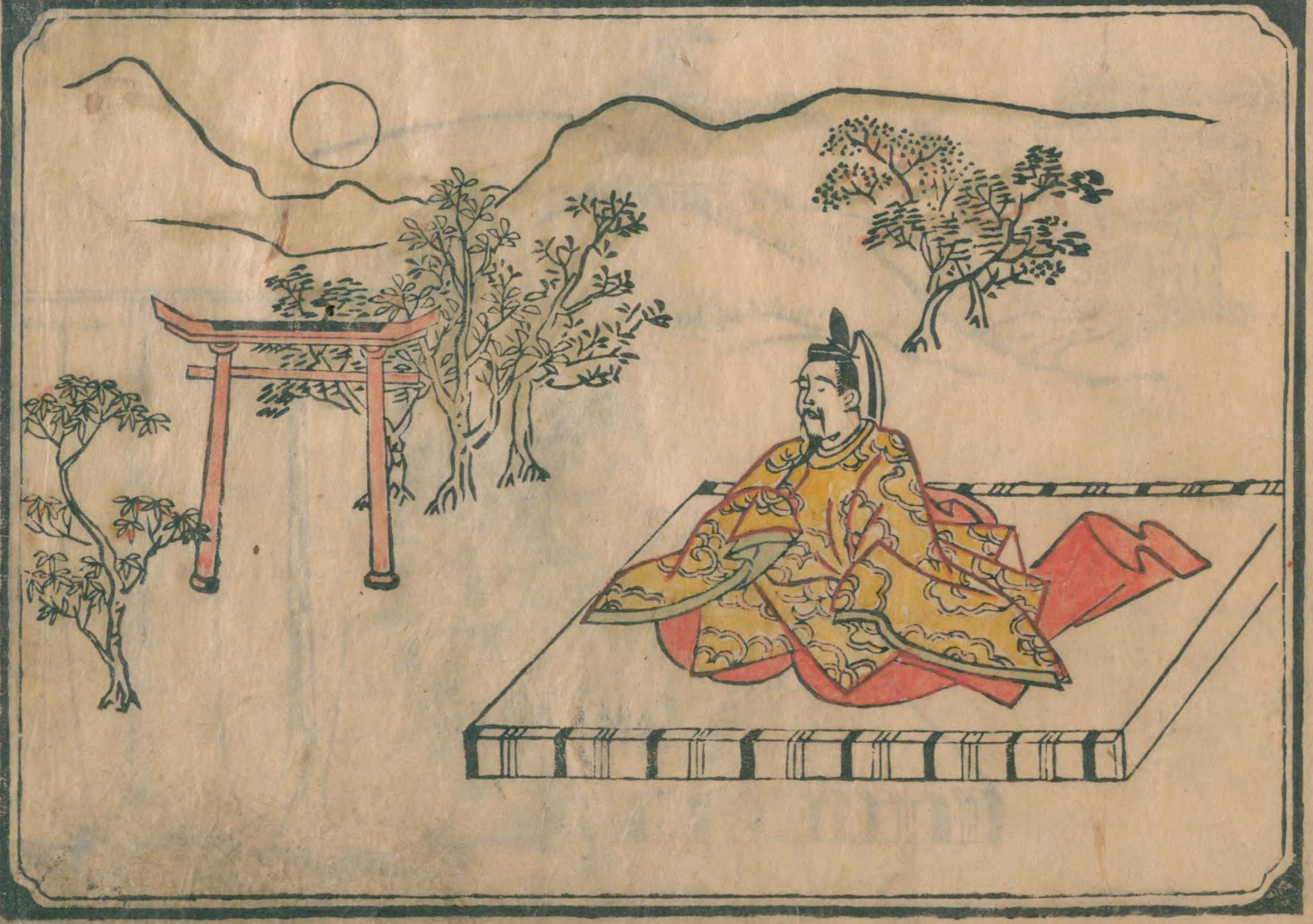


なかめはや神路の山に雲消て
ゆふへの空をいてん月かけ

此哥神路山やらハ内外(ないげ)宮の山なり
時代(じだい)を思ひやりて人の心よりきまさるひかく
ちに神冥(しんめい)まゐの光をうけてはかりなき世
をうけたまふひの中清て月日光(ひかり)を給ふとあらて
やる心やきよわかく神とひとしくあらはさ
すけさやわりしと神慮(しんりよ)をそへて心を世にあらし
神代のすゑにかゝると父はさぬの郷(きやう)とし神代をて
しあはせなり

こゝろさやわか世にしめちきりおき
そのこゝろを神やうけまし

此哥ハさゝれいしさゝろの心ありてよの
ちかめハ神武天皇(じんむてんわう)のすゑやみかとのしめおや
つゝのしはかりまてもきみの御代のちかめハ神のまもりまし
す御宝位(ほうゐ)又いまの時代(じだい)をうけつきて世のたへぬ御
代にみてゐまゐらするにや神やうけんといふは世のかぎりに
いのそらをいのるとはいふへしかゝる御代に神世のちかめハ
ゆくすゑをとをし給ふにいのりのれかりとて百王百代のす



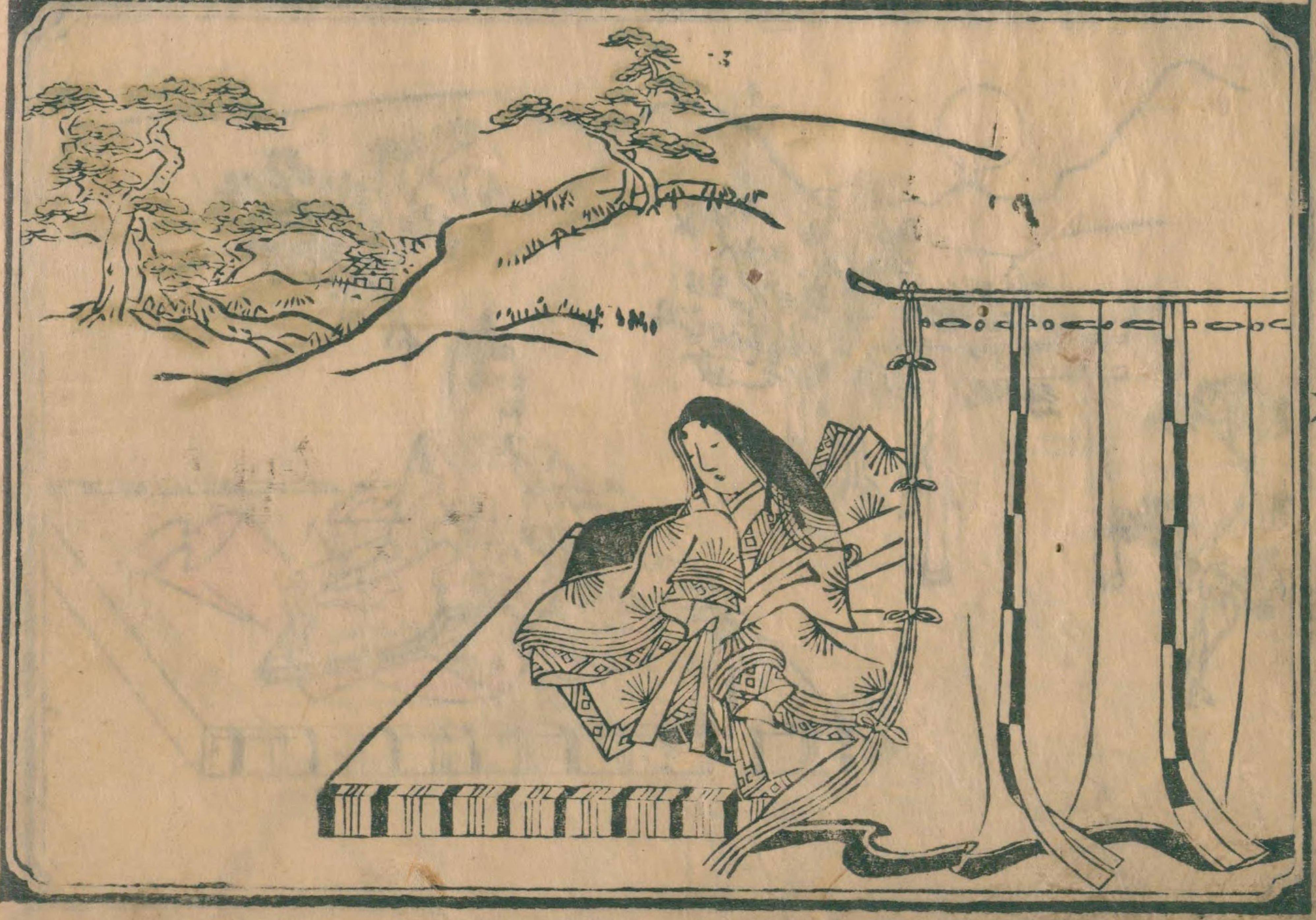
式子内親王

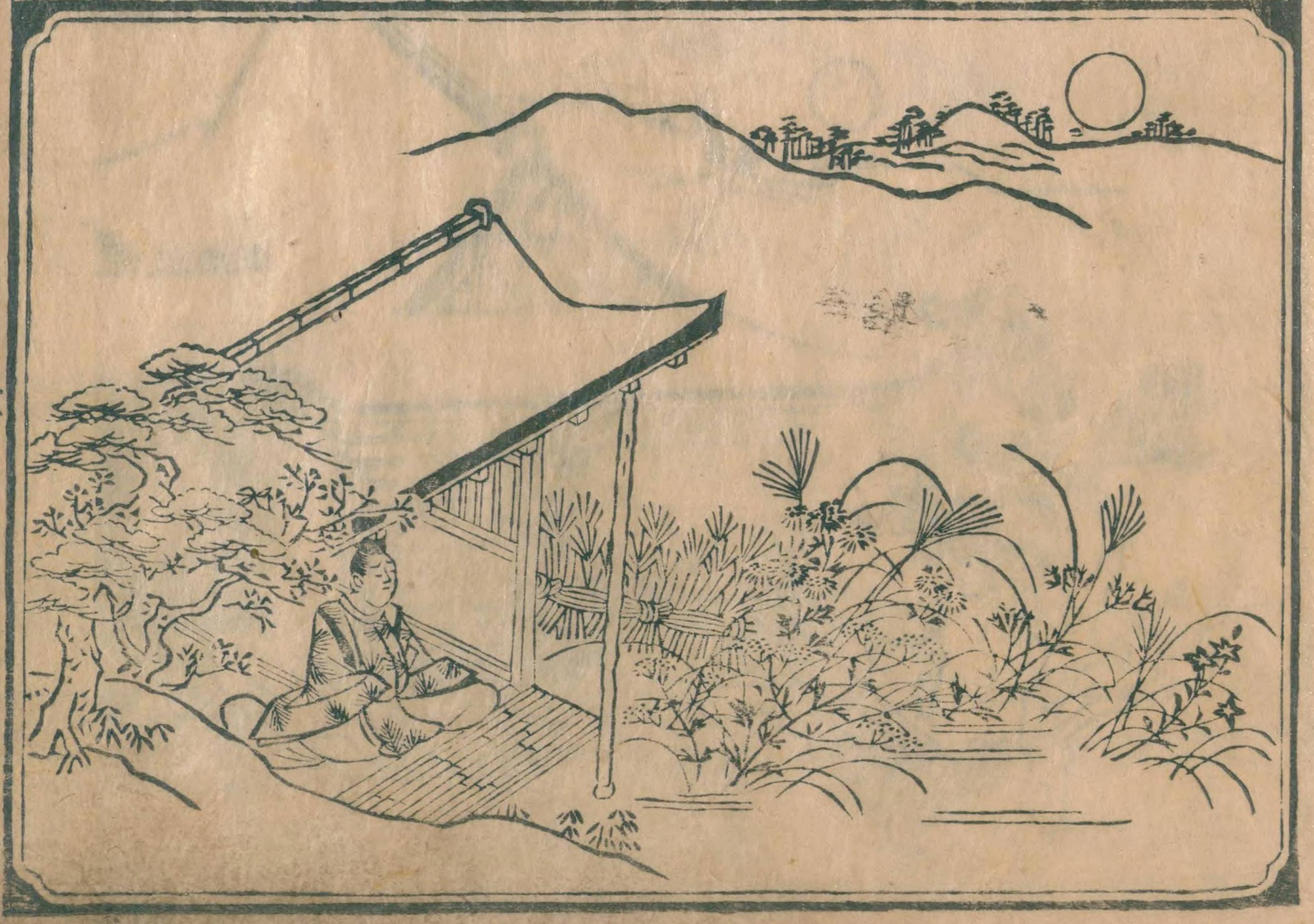
山ふかミはるともしらぬ松の戸に
たえ／＼かゝるゆきの玉水

みさら心あきにハ春とわかりたる山ふかミと
よろしみ字をあてこれなりけり句にハさかり
てよくつゞりて山ふかきあはれなるしげけり
すゑやかにこまやかにかとなき山ふかき代しそれ
まへあはれ也むしにかなしきゆゑ
のきはの梅も見えぬほどとふるを
ひなかめてたきいつとまてとふにすくる
人の行しもさけてかしこきりし逃べし
されハ玉の雪水とこゝろもとひわけをいたむなミぬ
と御つゞきをとりつゞけてや絶えの時ゆく
の下にてのすゑにありそのうへにひいわ
とし侍りよしあれハ式子内親王のことさらにまよわ
えし給ふてこれなるかたけのちのひしにけりぬ
とこしつもりとりつぎとしてはつきりかよふや
たゝありにけるすひさうくおもひ給ふことね
とるれハかのはくやせしめてしやいくえんすると
とこしつかてあるはれしはいよしてありとかは
るを作るといふ也けるにこそ

ちきりおきし秋よりほかの宿もなし
野にも山にも月やすむらん

心ハ八月とあゆる月ハ秋ゆへあはれなるの
始とこそすなれ中にも月ハ野にも山にもすむ
住わたれとこそ歌にいふ心のやうなる也へし
ときれたるしいふことばにけれく歌に作り
かならずとかまへるとゆれにけれと
ひさ給ふ人ゑんぶ縁の宿にけるゆゑやかうそのこの
かある也へし又秋けくわのすらしいわかくにこそかふ
つくしえなきそありけれかくさをらてしあらそ之
ゆ思ふぐいうけれ秋やハなくなきでありけりつき
まさに人を給ふと世にひにつまりとそのようそ
とうさとけてあるにえしひ給ふせまにもつをとへ
ひさすへをもれかけてそうしやさとけしえ前
御いうとあちれはしにむらずるたゝひもらべ公
らに葉うら集中や萬葉れらに人のりひ也ハ意の
うらぞ給ふんとすれ姑射の桐葉をこれ府云
詩もうし吾よ揚情をうまむわれをしりことをえ
今文志をつゝひめてしそまとこそうの付たる歌学ぞはる





ガラス使用

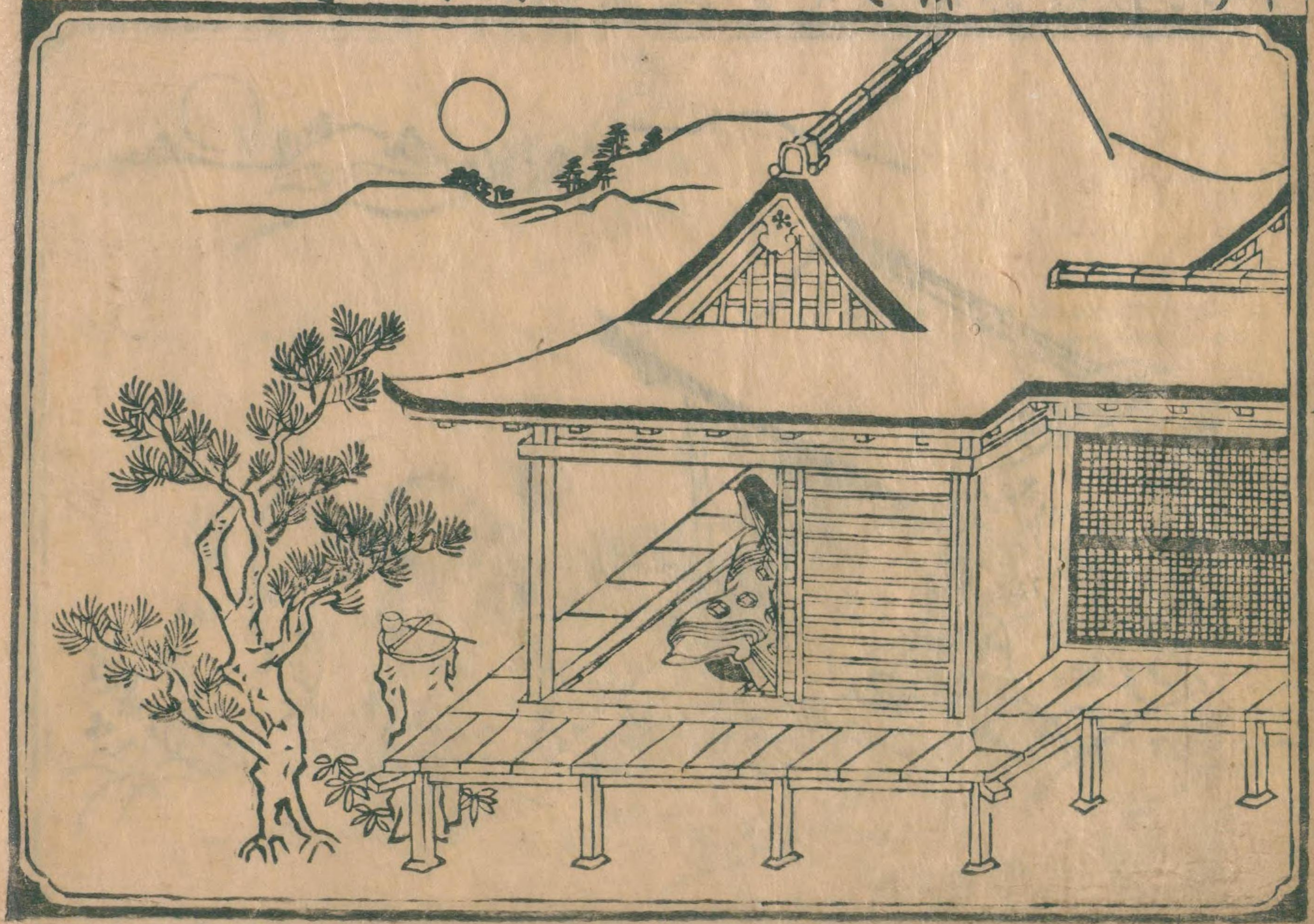
此歌の作とは秋のけしきのこゝろをひきそへられ
なかりし又おほく后宮の作としてしやされしなかり
二条院の御時のこと隆房卿の撰なるへし

暮まちし殊や今もいつね海士のまに
いさくあふけそ山のはの月

こゝろはこれ殊や下いつしこゝろは殊
りのあし。このまにとくもとらふへきと
わりし侍らあがりつるかなや

ひとれくけぢちるけ御月〇はれ
許のこゝろありてもとの月日と
先たゝ志のひとつ心のこゝろ侍るなり
うちあけ御しらたらひとつの心かきゆく
よむなとひとれうる〇なりけりらて
心の秋まてふや
あり御門に一流あひとつ出れちきりたえ
ておもとうけりあるへし

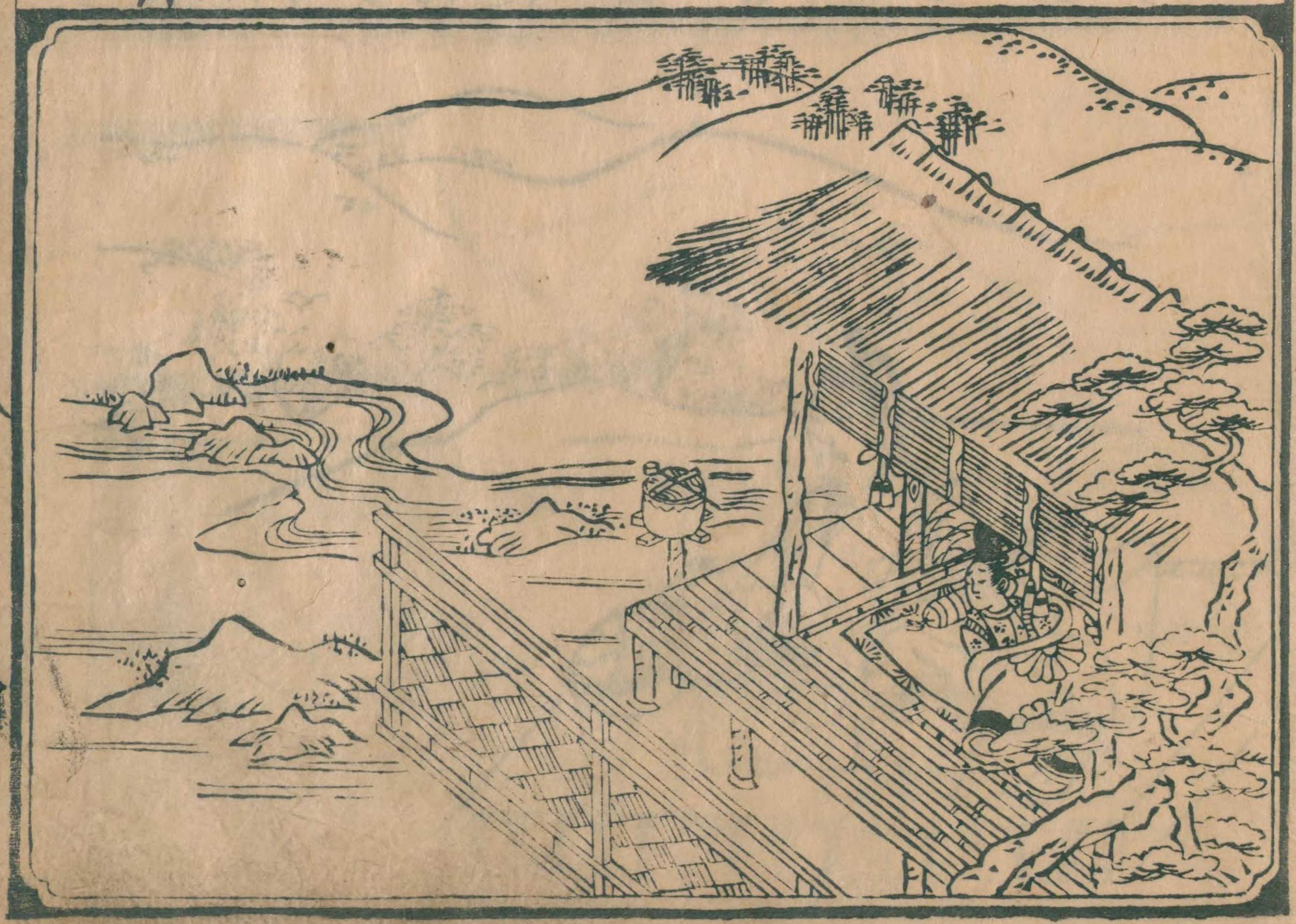
むかしをよむえたえ〇みのう八
志のふこゝのよゝりりそも侍



られた志のふかひのこゝろふかきあし
よりりそもかくいかく志のひくもなし
くへゆきかへしよまりこそせあとらり
あひあへくかくのごくれあるを切よこ
侍るへきにこそ
いきそよ〇あ寺ゆく人〇ぞしらし
このゆふつれとこゝろくへし
こ侍り御すり心うなり給ひあくへおり

夜ふくるも
まゆみのを
すけさ川
うらぬるよひ乃
神のきしまは

これたゝあきれつきさきおり
あり後にゆあふくもいぞおみえとの
侍んとおり

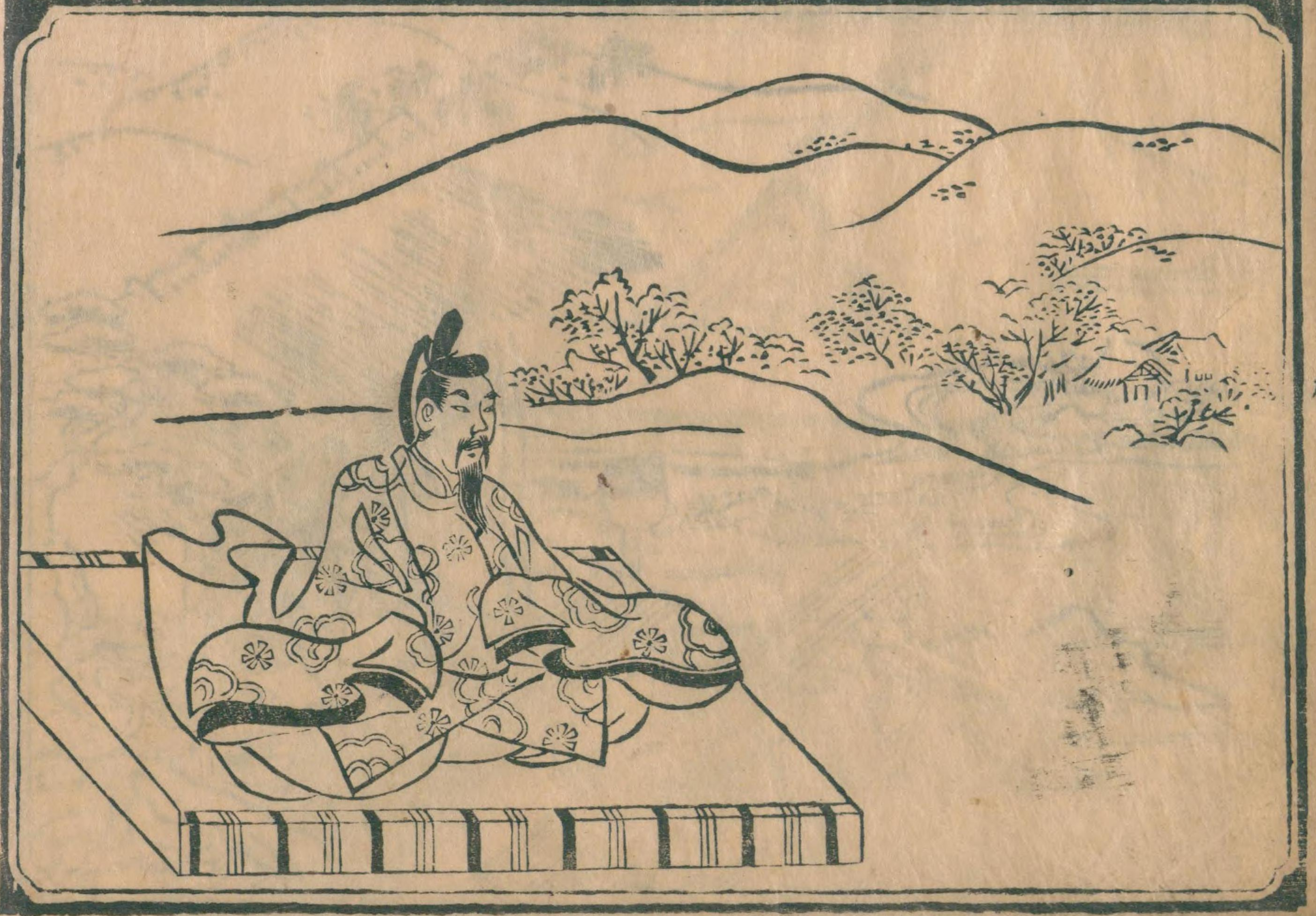


それならむむかしもわかぬ秋風は
いくらかはもとの川のせも海さ
それなりとふ淵か瀬八むかし海とそなる
らねしそれなりつらなりされしむかしも
わかぬと八秋おもひそへせよまつと年ふりり
られへなくしかも見代かはりたに川は見ゆる
風もかはりぬるなりされどいとくしく
これかはりとこそすがたのとまりたれとも
めそこれかはらそそのみ歌のかきとむすぶ
風ならむといひかるさみなしたかしかく川
ぬ秋の河ありぬ出かしよくてらむひくき
よかりけり

後京極摂政

みよしの山もかすみて白雪の
ふりにし里に春はきにけり

みよしのは表にかくりなりやまたあをと
られり山もかすみてとのへるめでたうに
西やかなりけり里とはふるさとのよ
しけり

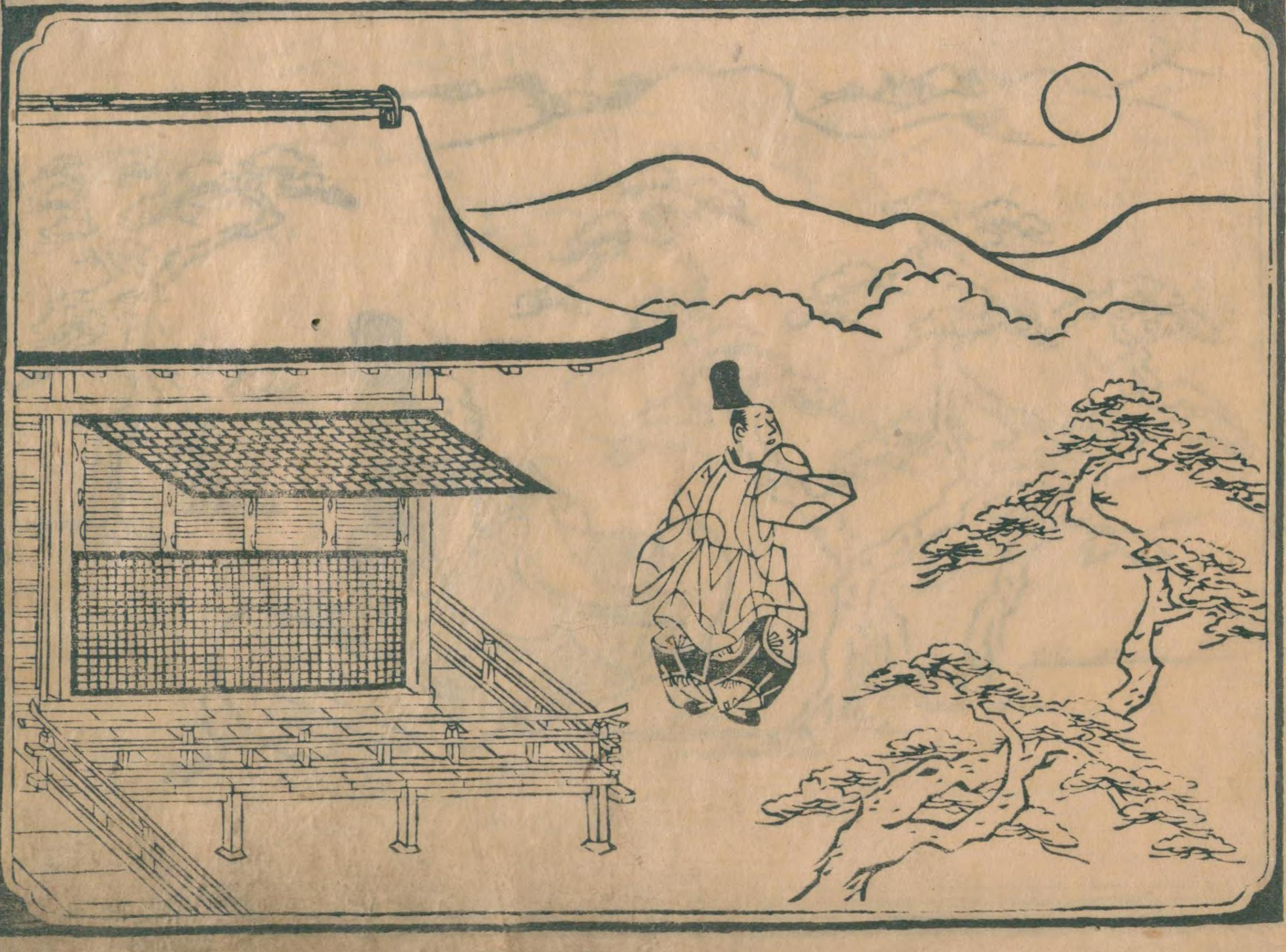


あまのとをおしあけがたの雲まより
神よの月のかけぞのこれる

あまのとや雲まの月さやかにさしいでたるなり
これ大かたのあめにおなじらの世かはりの
ともわかえともは神代の月かげなりとやよい
すか雲のとをおしあけたりひてなくし
わか漢にあめさしかゝりたるくもりの秘
はかなそのこされなり

雲はみな
はらひはてたる秋風を
松にのこして
月をみるかな

月みるのにたえずとも秋風なりひゞく
松くもりなくてねかはへとも
ひし松風を杉りのこりていふなり す
りなりけりゆく月と見るか
雲のさかりなり



ガラス使用

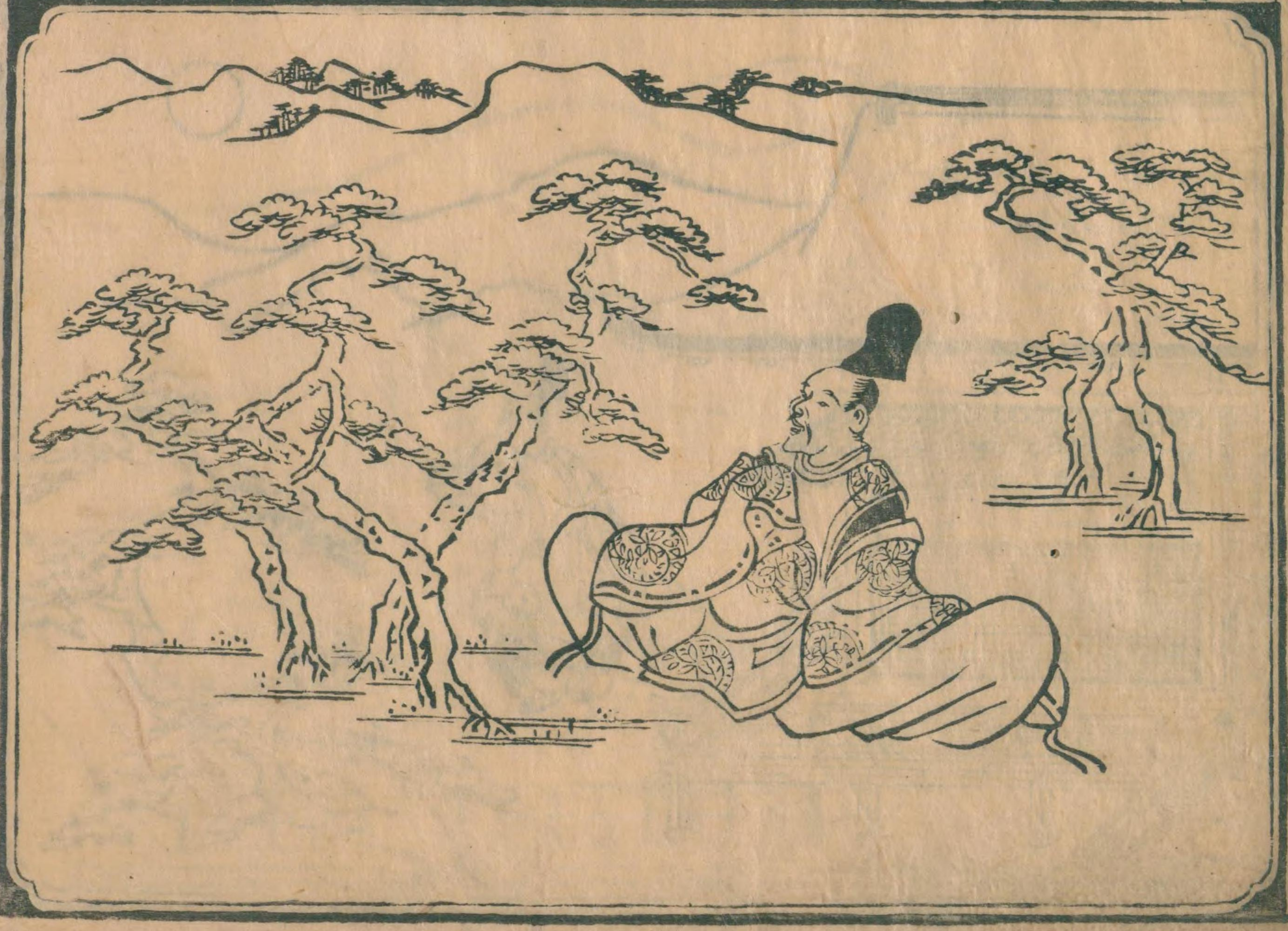
なかきてものこそや人のかなしけれ
　これぬ夕くれのまつ世のとき

身にも心にもとまりて哀思ひしらるれ
人ぞ涙こぼれならんやおもひしらすや
侍らん

又ある説にこぬ人をまつ夕ぐれの哀まさる風
ならひにかけりつるを思ひしるらむ心今此歌
ことさらに未練の心よしなり

詠すみさびしめて袖にやどれる月
　さりとて人の哀をかけるやうに見えしを

これは袖にやどるとてもその人のかけたる
かんもてつゝおもはせぬて詠すみさびしき袖
をとらへてうらみかけたるよしなり
ある説に落られてやうこゝにけるなりに
なりさりとて今はたぬとものゆへだ
今此歌をとゞまりてよそへり

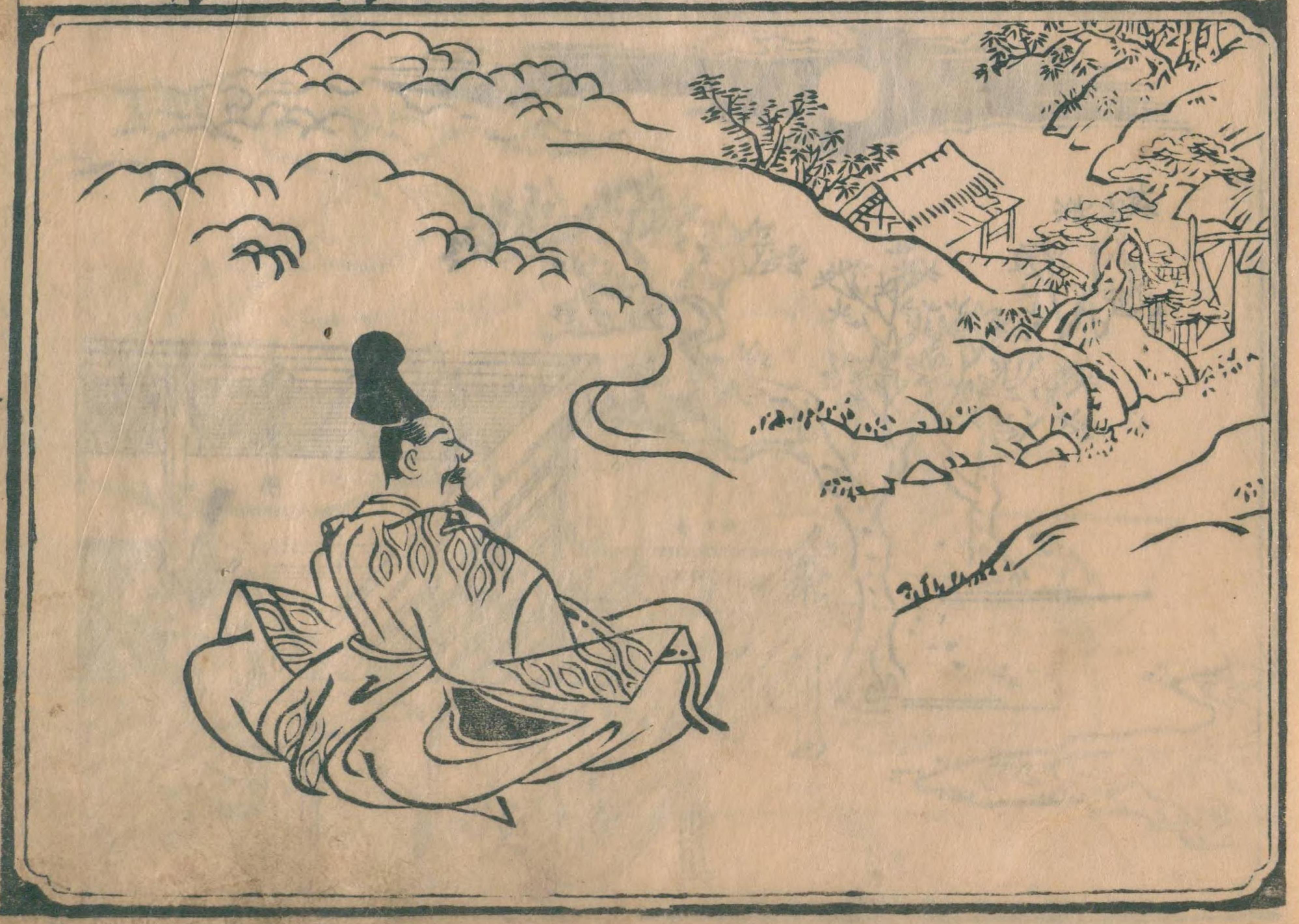


いつはりと今こそしれ此空の雲
　月日へてそこのかはりへとは

心をたゞ今こゝろそちらり侍しかおも
は月日へてさても此おりへやるもの
ところむよりおりん今日もるそのころ
にある月此あるのの月を待出つるの
ことをいへり

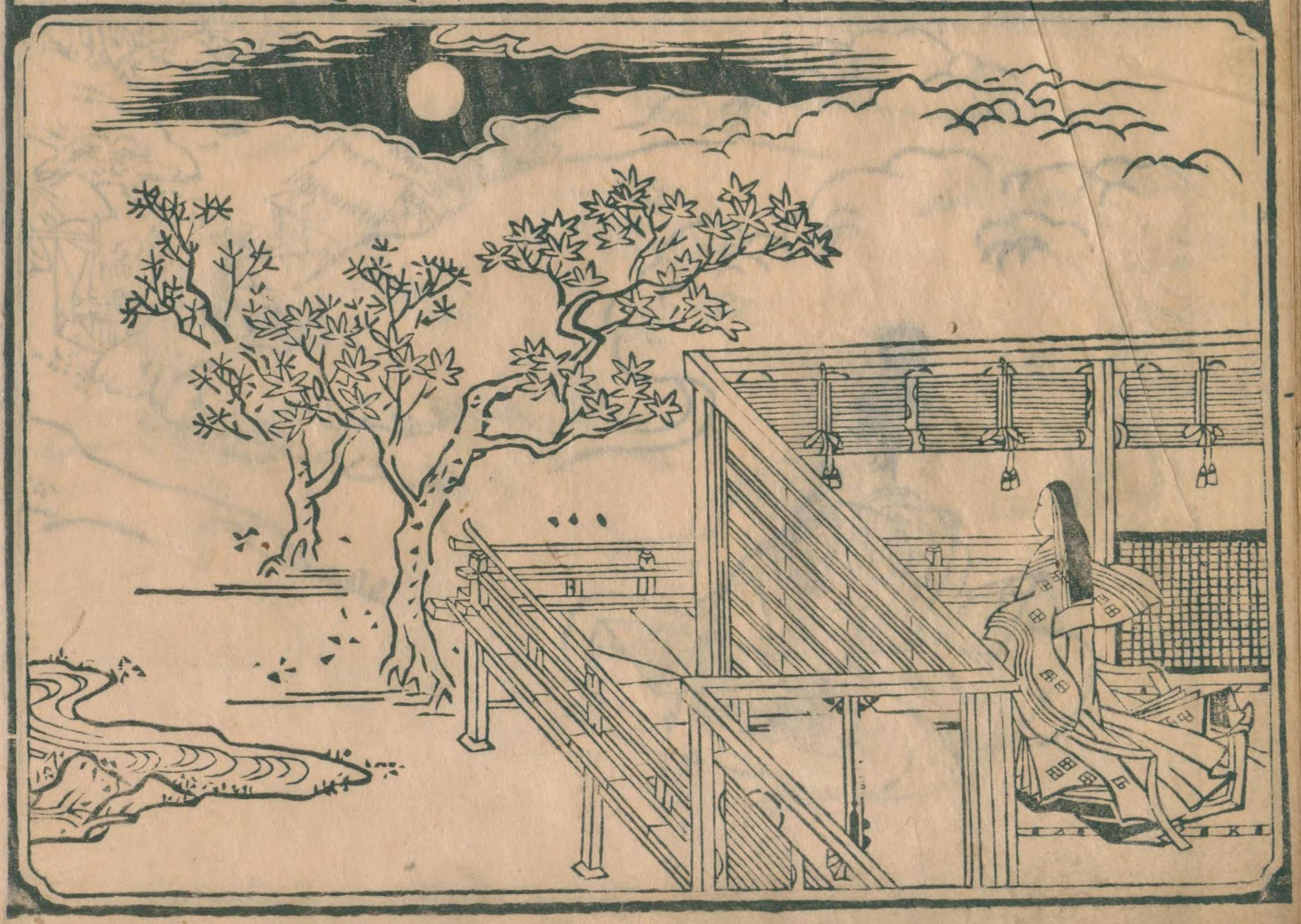
つれなくもちぎりて出し雨ふけるの
　こゝろんりのとふ雨のの月

心をあらはさぬやすけなるに面白なし
人を恨ぬるよれせまや此枝しし
あはれのちかけ侍　秋の風
この事よりて秋のかせている所縁を
何まことへ其此に吹し此枝
ひさしの風は秋風のあはれなるへきさめや
あるぬ涙にてんむ天雨まさぬ侍るの
人を恨ぬおりきを波紫なる事改に候ぞ此
是もかくのごとく此つるめ



然くりあらむかり〳〵涙しねとて
月るへうそそのうに雲の
はさう色はうよ外はやのゝいてまりね
ちらそ中月はめくりとあ雨くらくら
うきの心ともれり。あれ心をあはれなり
絶えそのうたをしらのへてはおりとへいら
わりよのそれはさうりけりくらおりかむを
つにしりんくうすけくらなり

久かた山荘のみちとそへそらふ
こゝさのふうすゝ言にあへるへ
このころや小倉(をぐら)山ふかく御まゝせハ都り
いのちありしいかしのうの宇治(うぢ)山にとりて
とよりてよみありし又真観寺(じ)に荷弘(えんばう)をと
藤家氏そそ後附念のりぎのめ称の
あいりふつくれさすゝれさにたゝるそ
今そさうんとよのこゝのつゝなり
それより小倉(をぐら)さうへ移(うつ)り藤家(とうけ)為家(えんけ)
小倉(をぐら)

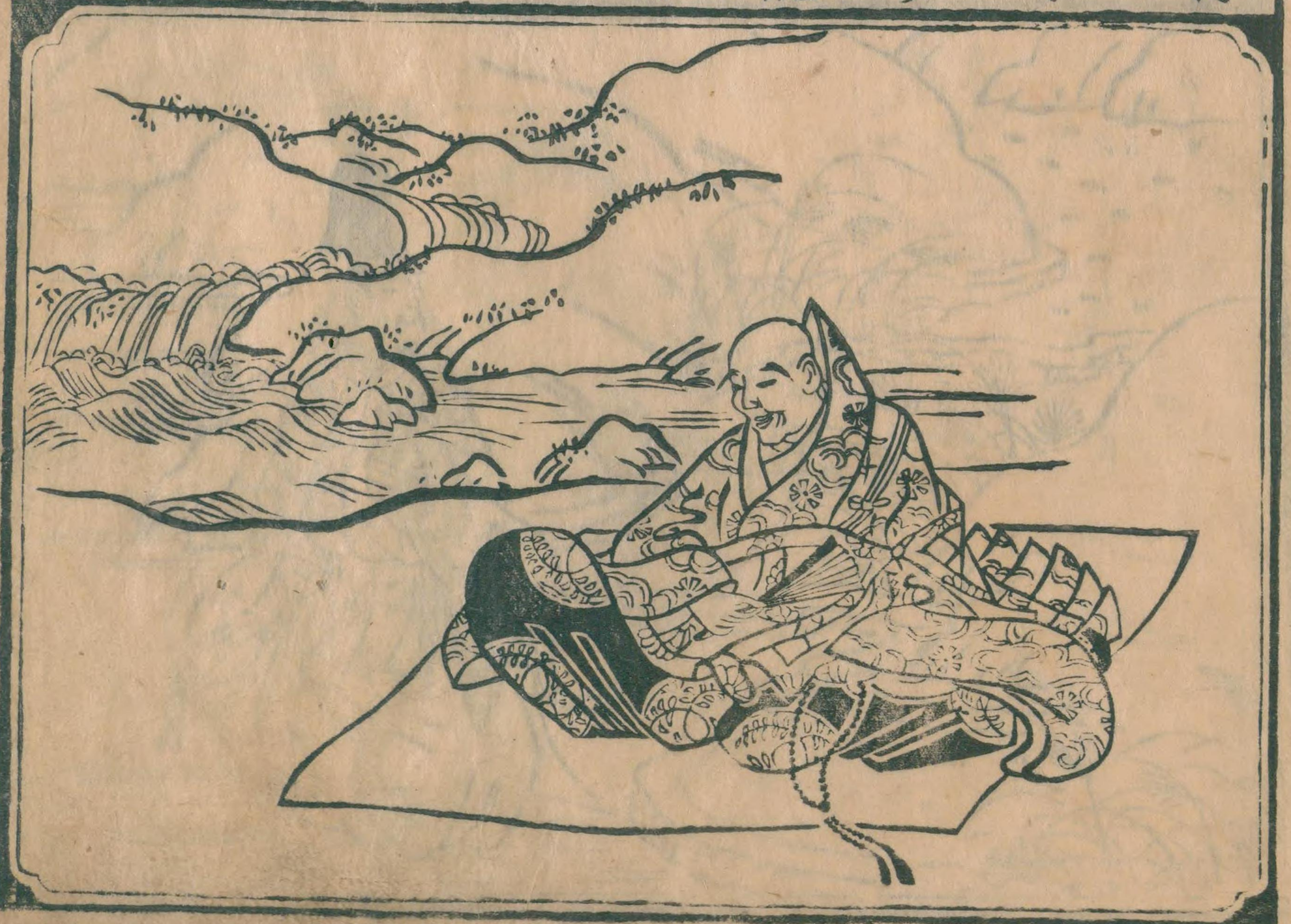


前大僧正慈円(さきのだいそうじやうぢゑん)

いつまてか涙曇らて月はみし
　秋まちえても秋そこひしき

こゝろはあらはなり
ある頃に無動寺(むどうじ)の一流とて慈円(ゑん)僧乃
流(なか)されけりかへりにちえたけらへなり
あんなるれたうをとほりとはなりあはた鏡(かゞみ)
やほゝ飛院(ごとくのゐん)にかしひの人おり語(ご)云(ぜん)三
まいそえうあへすりそのうれくらハ
さらはのさなりあゝきうはくらはま
てらみしとや

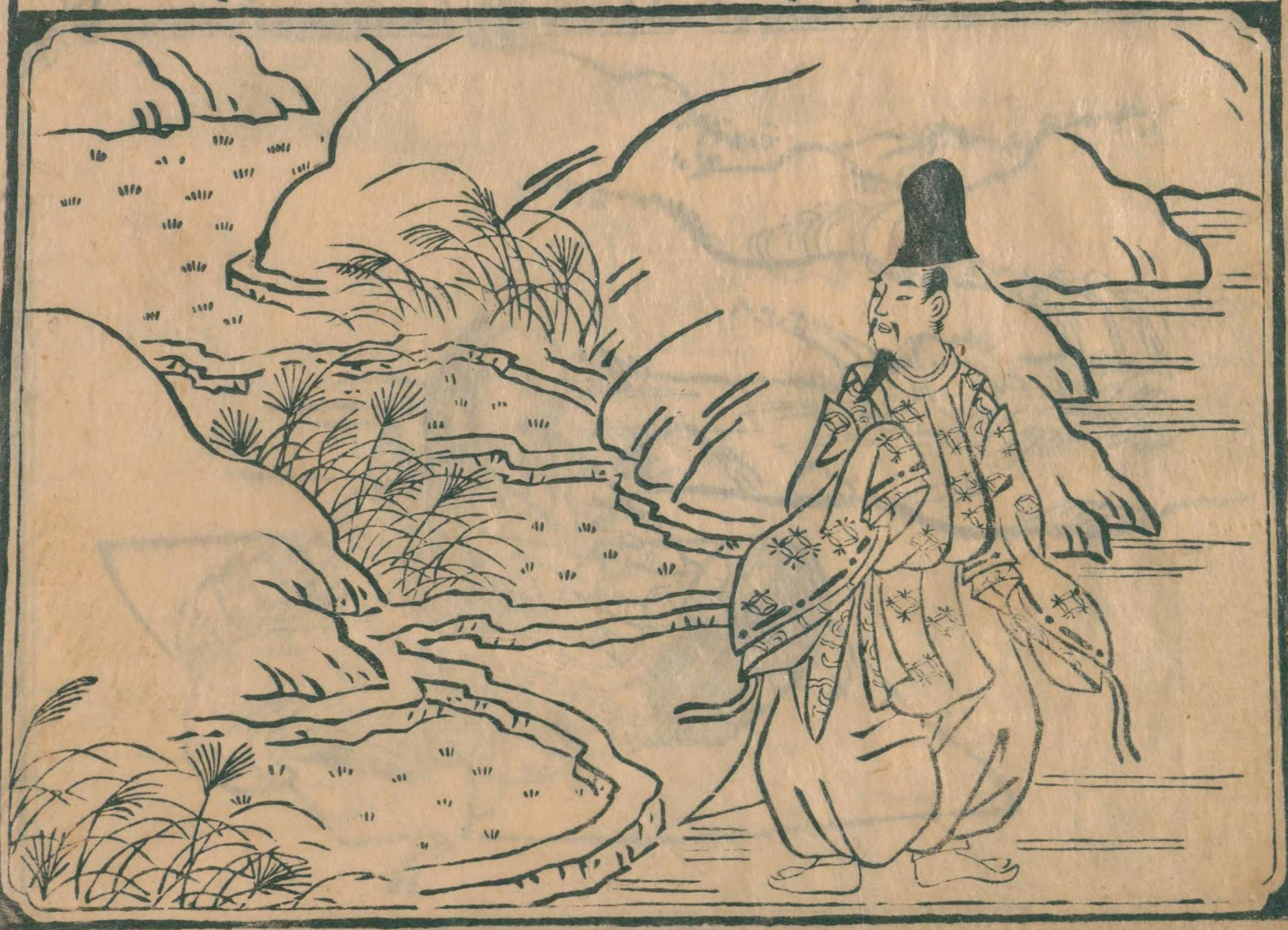
まあなふちう降くほさく袖の女を
ありらもあくそゆくおくしれ
こゝろをさへしさうすゝ寸紅葉(こうえう)とさふ
のるれしわうすみさ此袖のりみちとへ
ありとしゑへそゆくようしうあんさは
さ夜なり



露をゆく山路わけゆけはすれは
　ほかに人ありしのこゝろかれ

此はゆきてひとくわかれ侍るおもひける侍る
まりやくれうたうろをつけて侍る
へきふやきひとことゝをきこえしひおかせ
なくとわかれいて侍まらおかれしく
うたにもいひてそのおもひかけ侍るとおもひら
へきにて

歌の面の心は尽させてやられつる
袖よりもつゆおきのうへしせ
心なたゝ袖の露は尽らはおもひへ
への露はりえしうすてやとそつる
おりつるはゝのみのあるるをも
あふけるもかに月をさやけき
此うた中た観乃心とハりなむるさる（ちうさうえれ）
まゝは　無問而自説　稱歎所行道
ゐ端不行法　安能發問者
此二の文をよく思ひ合すへし

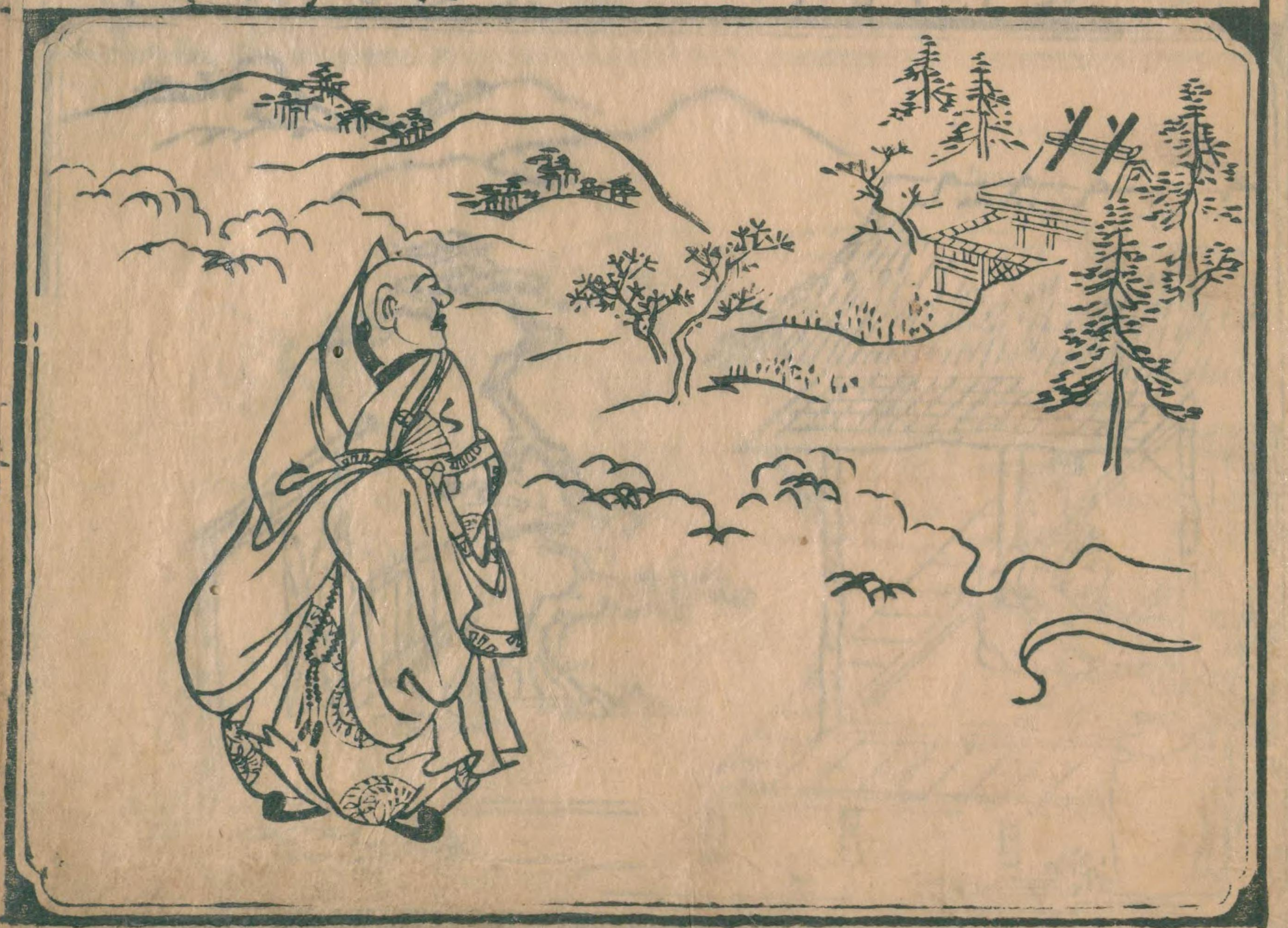


おしなへてひとしくあれは雲深く
　ちすみゝおやしきゝおもふかな

このうたは心おかりつるあらし和尚（かしやう）の御心の
ならかそしおかりはすかなしけつらにのあ
とかえつりこゝろつあわうハあらりまう
らすみゝあ中ゝさのふかつすハゝのこ
ろ世にゝれくのあるとおもりうえ末日
よしれ和光なくうりぬとうすにそて侍る
とかりるとさうめくへし

よの中はれゆく春に行く秋の
　ワつゝひくそとも云ふかな

かくあひとしめのあきをうれとゝれ
いとゝ抛られけることりにて之
住わまこしてそれにあきりくいのきそ世の
のそれ行そらはあ前何のかゝとおもく
く思ひうすゝよふつうときさめひと
門さあれつもいはそうよりしおり

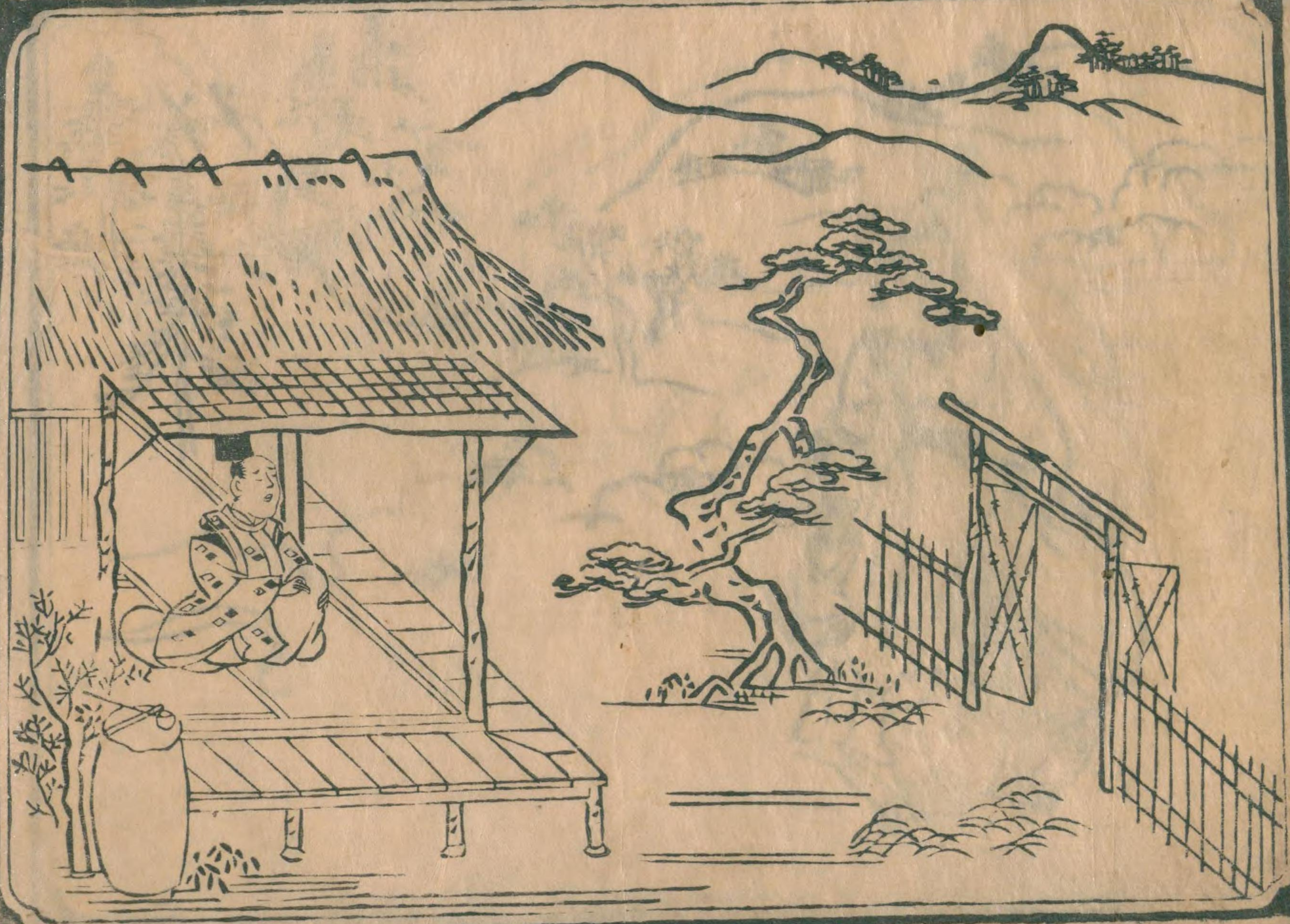


かくれ里のゆふしとふねま一ハ
人もこそへして山おろしの風

心ハあられたり荒てあれさまもさび
しくうらさびしきゆふぐれや
みわたすにあはけいとゝへぬ宿にされ
さらぬくこゝへなる世の杉まふてとも[illegible]
あいなれさうりかくのこと此[illegible]のなきし

山さとはさびしさ猶やあはれなれん
まされんらしと思ふさらしと

心たゞ山里に世をのがれたる人は秋をひ
とちこもりてハいかほとにまされんあを
もひくれにたゝやうそゆくへこそおもひ
しれたるかわれく又世にのかれぬる本
をふれてちきもしいかにあるかたにや
るゝ身をとりみるけるようしゆそ
侍らんし
又此の道に山ぶかに住つきて捨世に出る心
と書りうけ侍るべし



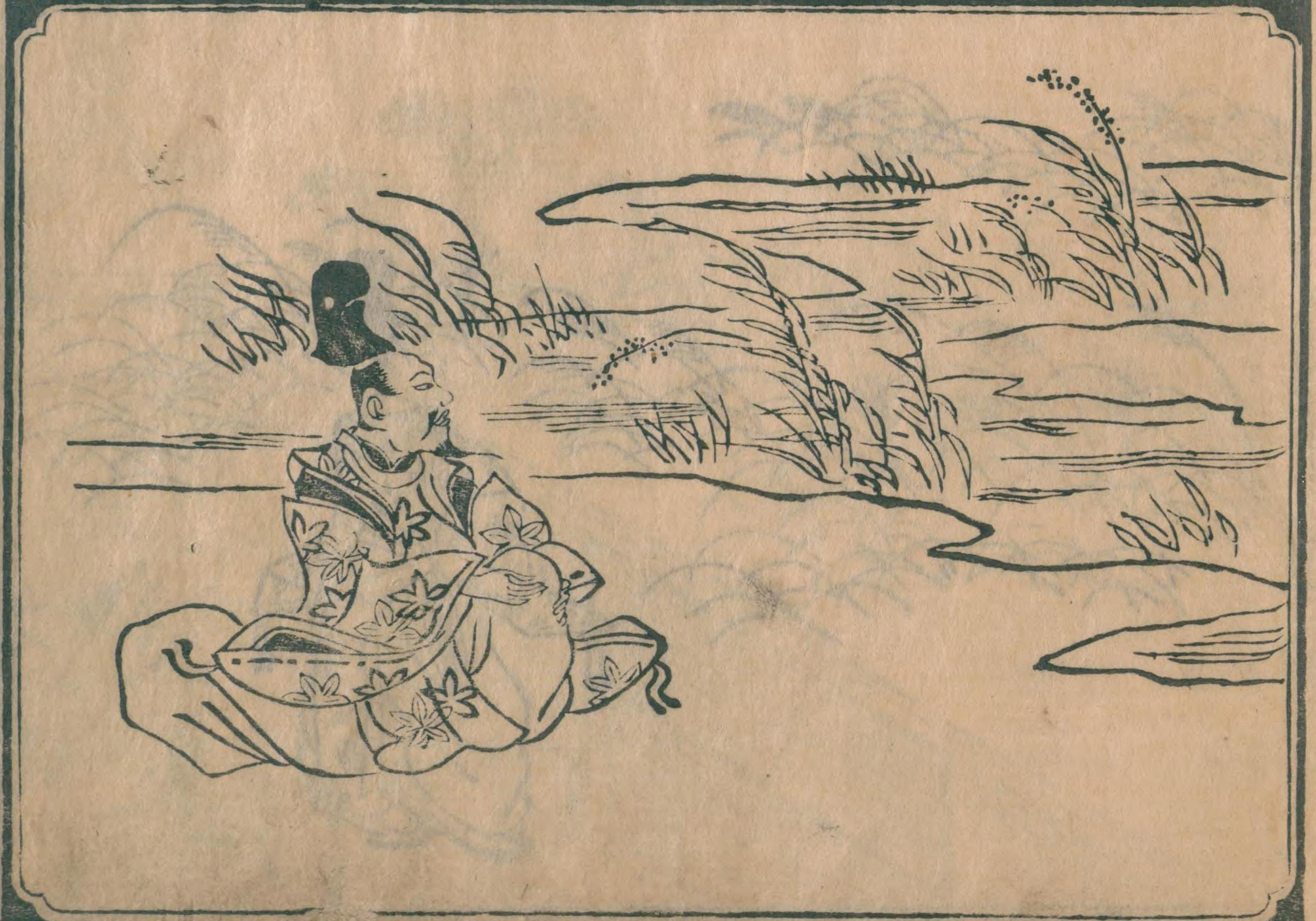
秋そのむら雨のはれゆくゆふぐすた
うけてもやまのはのまゝしくれ

あはれなるゆふべに七夕の妙なる[illegible]とて
あはれなる世ハいかにとふる[illegible]
あはれにうけてもりのこゝちのむかしの[illegible]

権大納言通光

尽ぬえや雲おてまさなおのえに
陸のくむかしのまゝ風そふく

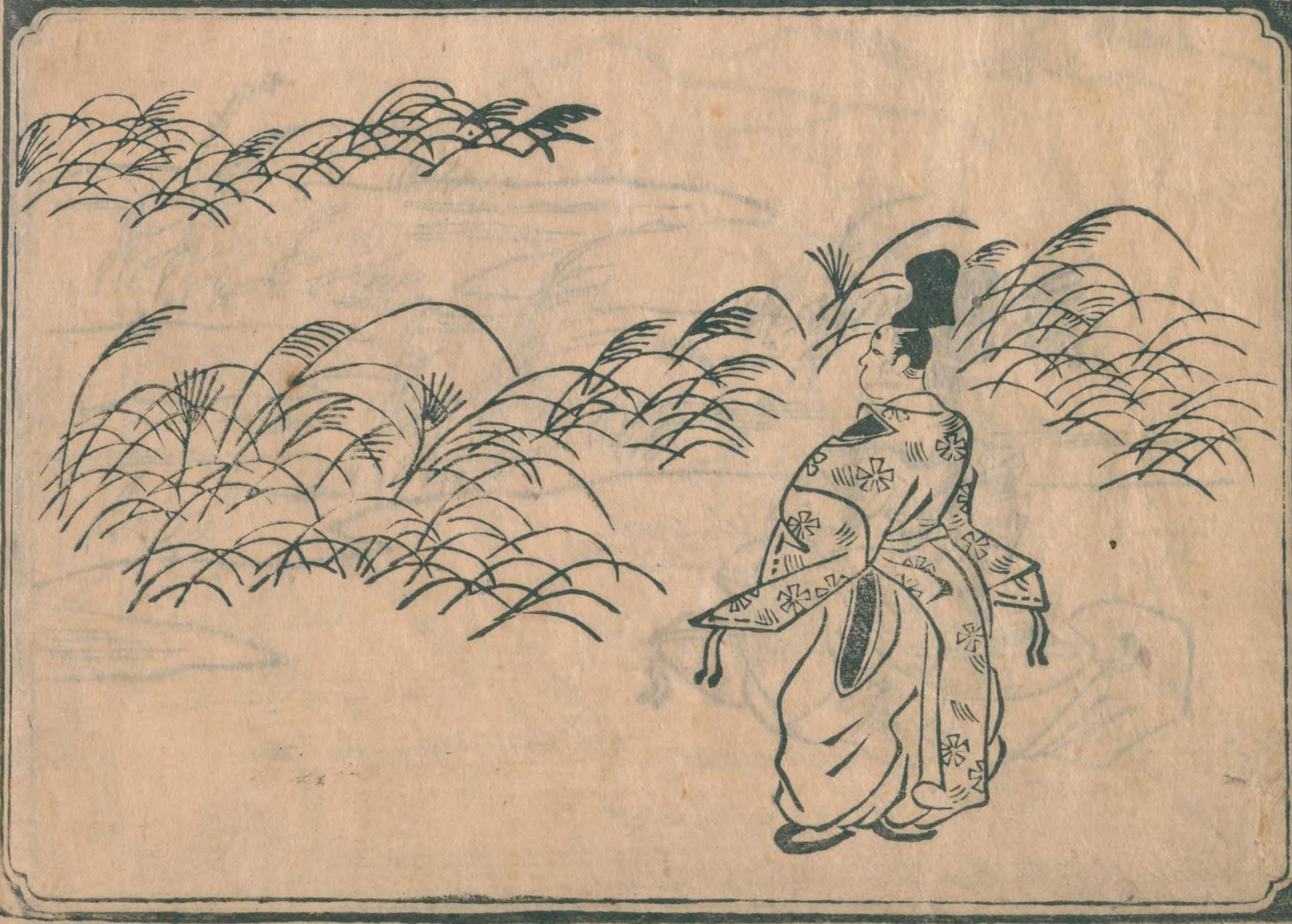
このうたハすゑすゑまてもさし[illegible]ゆく
ころもえくれはてのはてさらみかてまそい
つりえ世へゆくかみかぬそくる風のゆくかた[illegible]
かさそいはしの[illegible]のもときもしとこれなれあ
しもとやはてのくむかしのまゝ風とよあるへき
[illegible]のむありくのこゝろふかきのはしかや[illegible]
[illegible]とよ[illegible]くさきとよりそなり宗祇雅俊
大方なる世にあとはてにはいかれとゆくべきにてそ
あはれにかなしみんは人のつくさんとそあれとよそよ
しれはそもそもくりゆりかごなり



むかし野をゆけとて秋のそゝろなれ
いかなりし世のちにまよふらん
そのうへ野径秋興（やけいしうけう）にこそゆけ
こゝろもむかし野なりしろき麻（あさ）のゆき
をそもあけゆんうをいかなる風のゆくも
あはれなる真おる事しわくれなるさ
こそやのし
かゝる袖に露（つゆ）のにほひなるべし

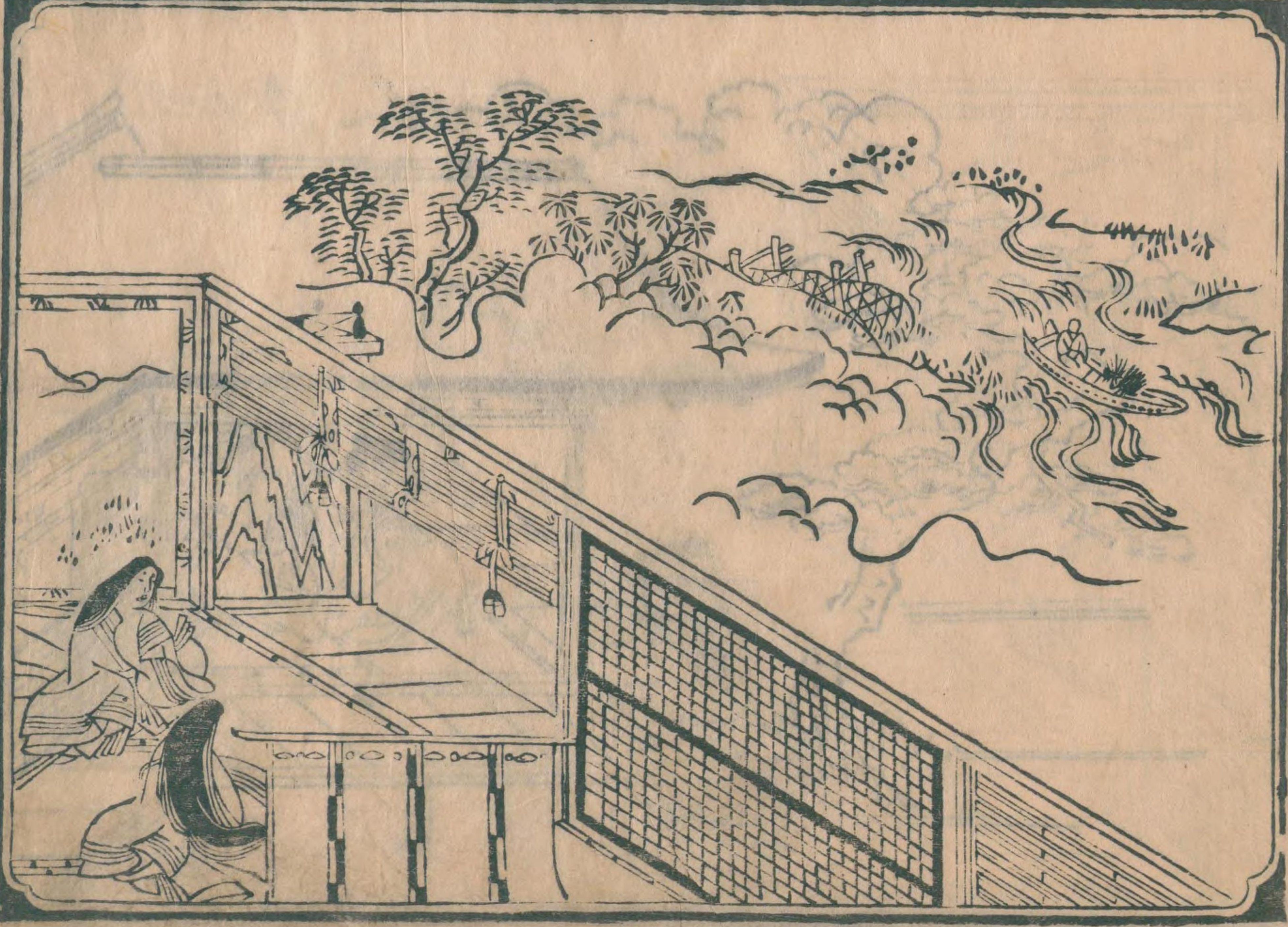
ふけぬるか
野へより山まへ麻乃
あらしふく也
あきのよの風

こゝろは夜ふけてすゑ野へよりかへる山人の
山ふかくかへる人ありけれはあき風秋の夜風
うちふきて麻の衣（ね）のすそひるかへりよさむく
けしきありたる真（まし）なりさそあはれなるや



あけぬるや河せのなみのたかせ舟
くだすか人の袖の秋きり

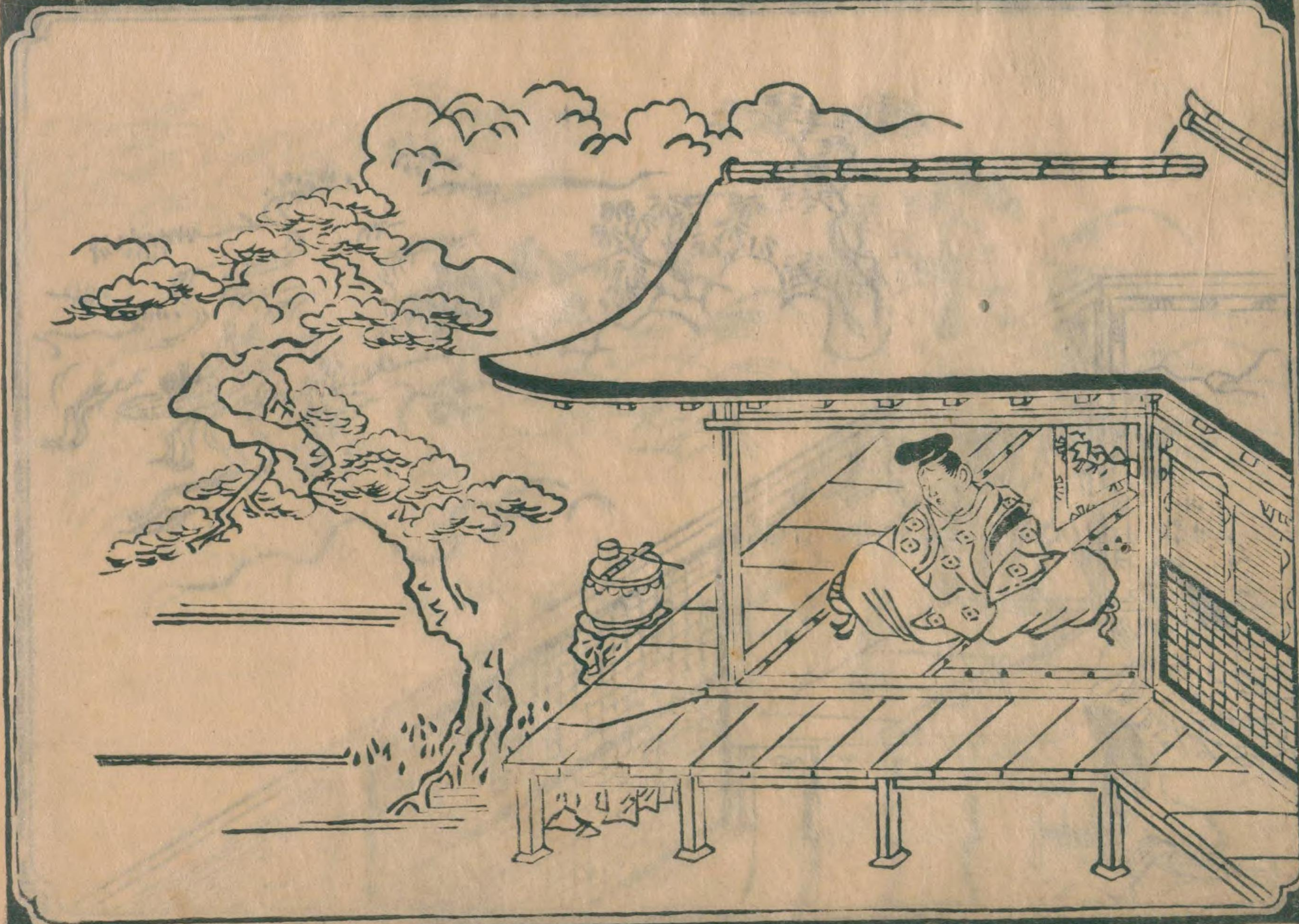
高瀬舟（たかせふね）とはいかたひきふねのすなはりたかせをいふ
くるりよきたうゝてゆるれやむさのこゝろを
あけぬるのふかき河瀬のまよりのあやめもあ
かゝる風へよぎりれ志ろくこゝろみゆとみへた
世事をならぶる袖やとおもひよせたるなり
月さゆるいそにおりのかた瀬（あさせ）よそり
わたしつゝ川のかぢのおとするなり
心ちこゝのひろわきれ真志のひゝきそかぎろ
つまともさりきよのそらのそぞろなりけん
みゆこありをきはなれぬや志かなしむ
ほのかにてふかき川ぐものとこゝ
ほさわかぬるすとてきとこひよせていて
うりそふくれとにとゆうなかてあれどもうき
つらしとうるこゑの月れきろくすりのくまなきい
してゆれつきふなかを身よつてきこと
ゆこゝろみかくよみありこゆさゝれをれつた
きやこかりつんといふなるやし



なかめハひぬそれなるゝ比りのそ思ふ
雲のたえ〳〵の夕くれのおもしろ
みえさハゆふくまかくものゝあはれそれのそ
おりふしあま月そらわれくへきとふかくてとふ
うらとそれりくるつひゆくへの雲なれなそ
人の面影をもおもさも此思ふ痛くなかめ
侍るまでにかくそれなるへきものなり

うきりあまて
志ほふの
山地ふかきも
おちはのかゝるへの
ゆきかへりつ

こゝろを志のふとはりて見える心
何とし我りたの山にかれなると
ひのはるかのへきところなりと
これハかれまさりわきまへそいふなる
へし

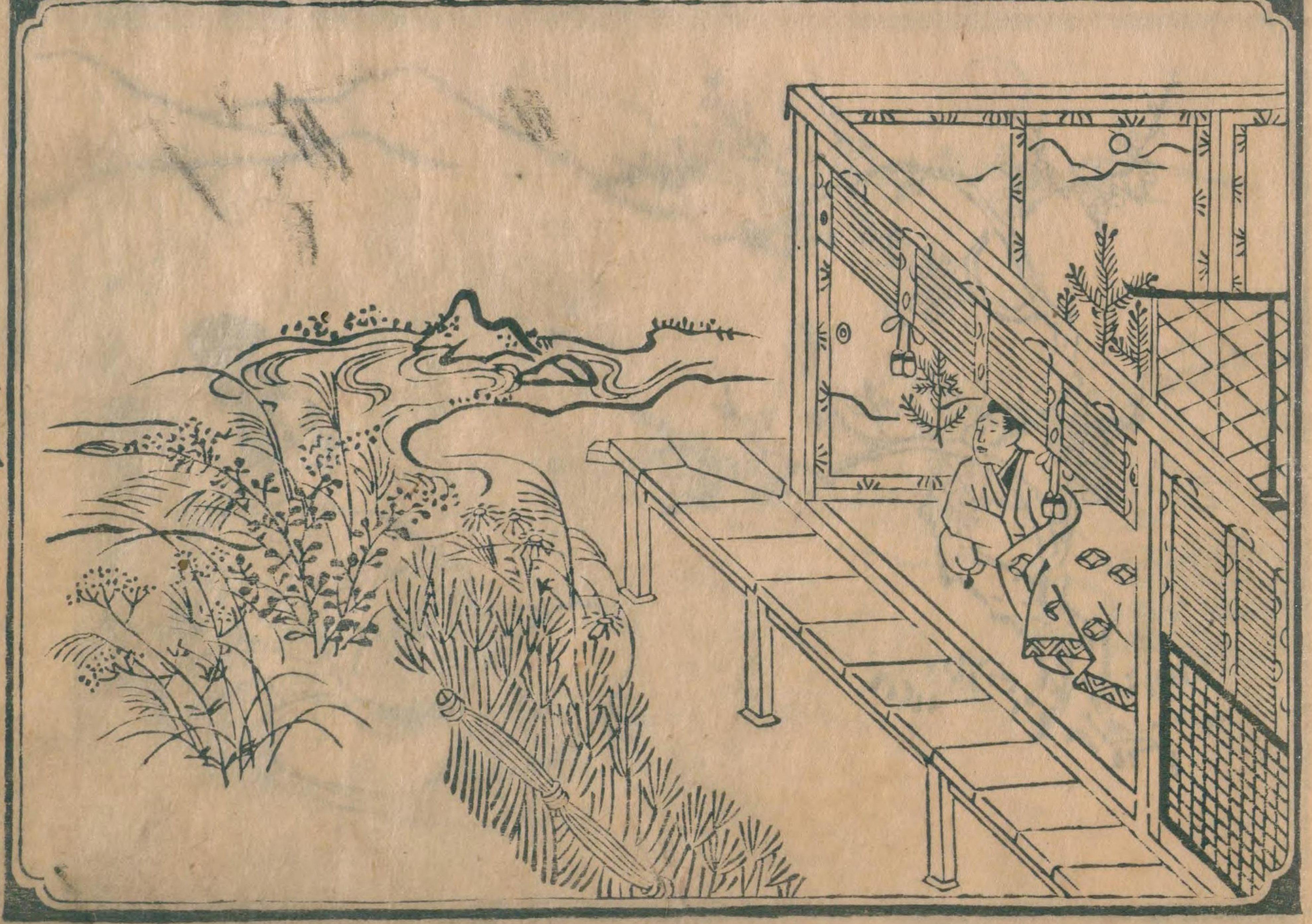


あさちふや袖にくちにし秋の霜
わすれぬ夢をふくあらしかな

これハ寂寥感情といふ心ふかくよめりあさちふ
や袖にくちにしとハあさちふの霜よりあらはれし秋
袖ハおもひよる涙にかゝりしをおもはせてわき
ちかや袖にくちにしとこれまでしもやれし自然
のこゝろさそハれぬ夢と吹あらしに夢さめし此
ゆめ見つくし此あさちふのはらより志をいふに
ころもろもを思ひつゝ秋くれのからはてつあはれ所愛
とおもふ心千年くはさあもろをつまてもかくおもふ心よと
いふよりもそれハそれよりせいとんのくみさまひゆう
らぬそきてゆものぬにはかやうのかあらぬこと
さりながら心にて侍るやうなる所にもおかしき
ひわりなし

たのもてゝせ候にくれぬおとこ山
あふくゝねより月そ有明け

こゝろハおとこ山や八幡を源氏れら弥ゆ
ありませつとハ志り侍るもの作者の比ハにかり源
氏ふかくおりませハゝしと本宮三所又弓
侍しよいつまてもくんどのうぢ弥八幡のよし



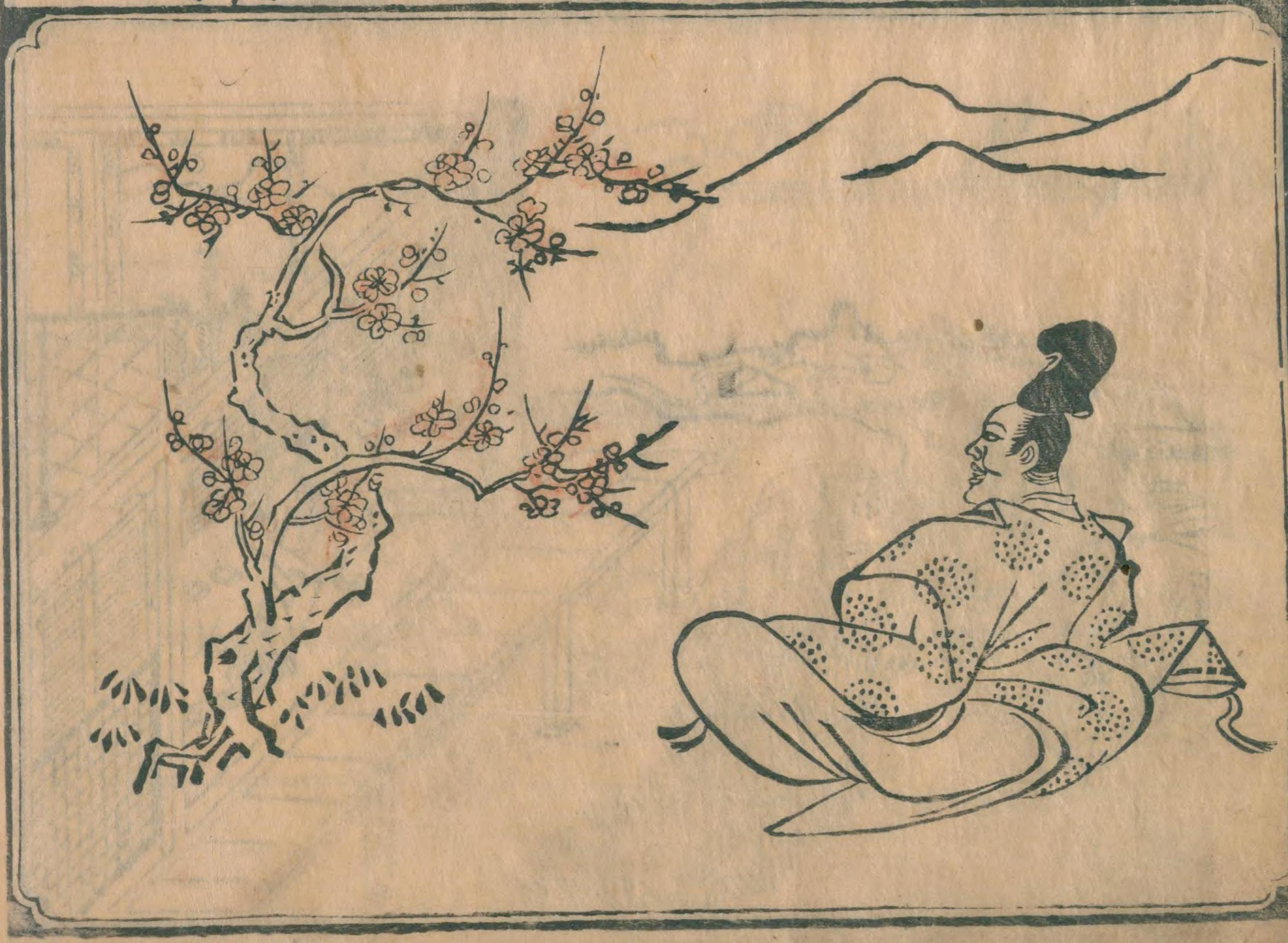
よされ侍りしと志ゝ人の名乳ひさこりひろはなや
ある隠士のありて世にはなとゆふかりけれは撰（えら）
れ作者（さくしや）のうちにいりたまはり

梅乃花たか袖ふれしにほひそと
春やむかしの月にとはゝや
権中納言（ごんちうなごん）通具（みちとし）

こゝろは何ともかうるをところの梅よりにほひの人の袖とふれあそてかはなかにひしゆれんとかくおもひしと志るへきりのいたくおもはそれ月をよめれはよめりにこそ梅のにほひのむかしを月にとふ心ありわひ侍るりなれところなく作者（さくしや）の心つくへき事に

あはれまたいかにしのはん袖の露
野原の風に秋はきにけり

あはれはよ志のえんかある娘の事ひとしくなれよせその中へはおきさちにさわりて袖の露れあさきの涙しとを海くゝ袖の露野原（のはら）の風もうち秋のくれいとこのひとを思ひよりし又涙よりきそてあはれるる物みなしいふなる也

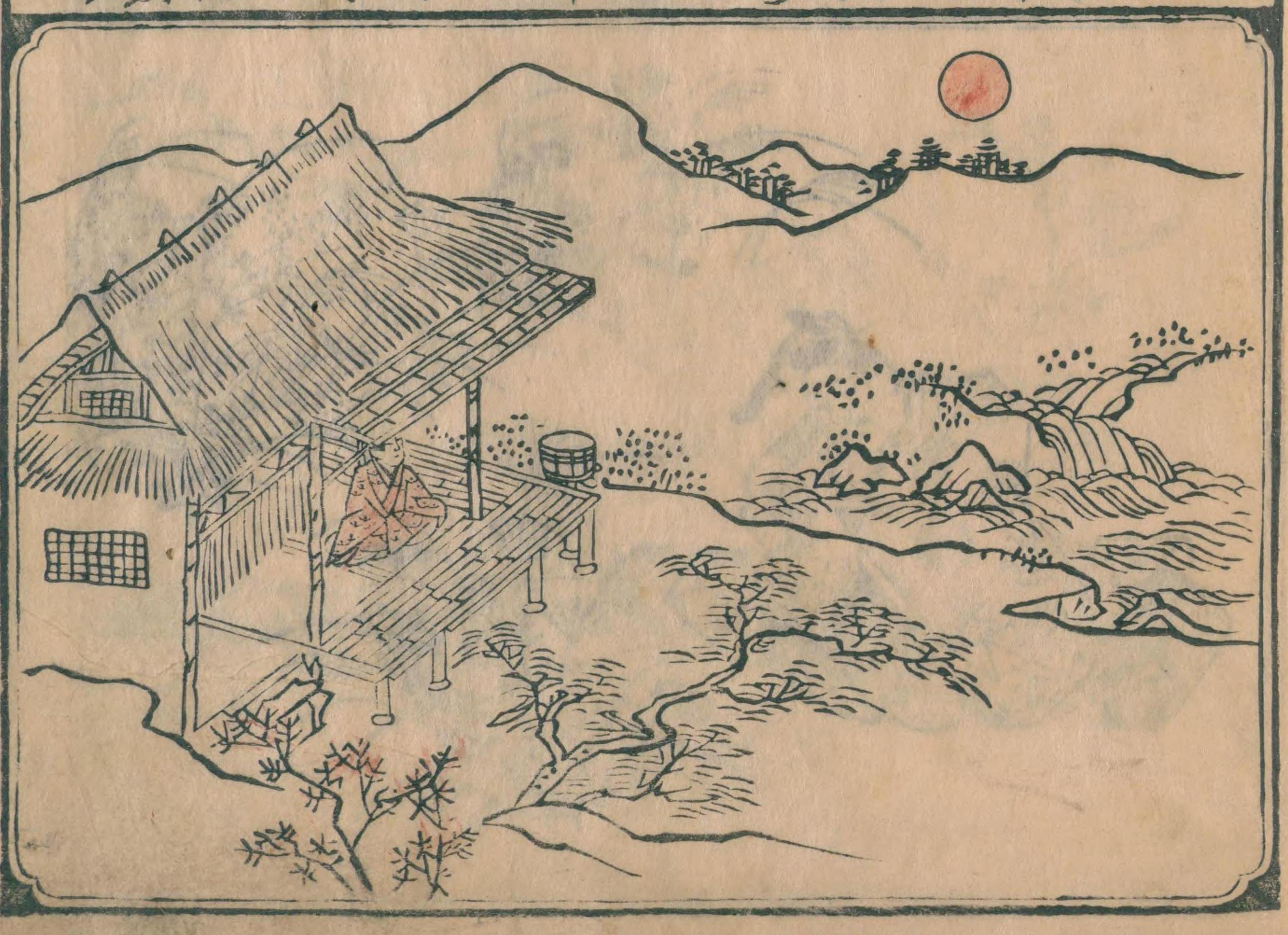


かけやとす清水なかれに秋くれて
月そとゝまる庵のしのまゝ

こゝろはわきてのなかりしものつくや清きしけきりのよるの月のひかりさやかなくすく奥（おく）人もなくさやかにてきのこのすころみにくみさひしきさ海なりある頃に中秋（ちう）は銘の月なれは月なともゆきにてかけんとありひ侍るかくこのへの心なりちくさの花もれはなかにみたりなり志のゝに月乃つり侍らん海とにこもたら済よみ人のさるへきさるへし月をもとめけるといひよこゝろあるへし

露むすふそての氣しきこそちなけく
袖ぬるよの月乃りけそさゝけさ

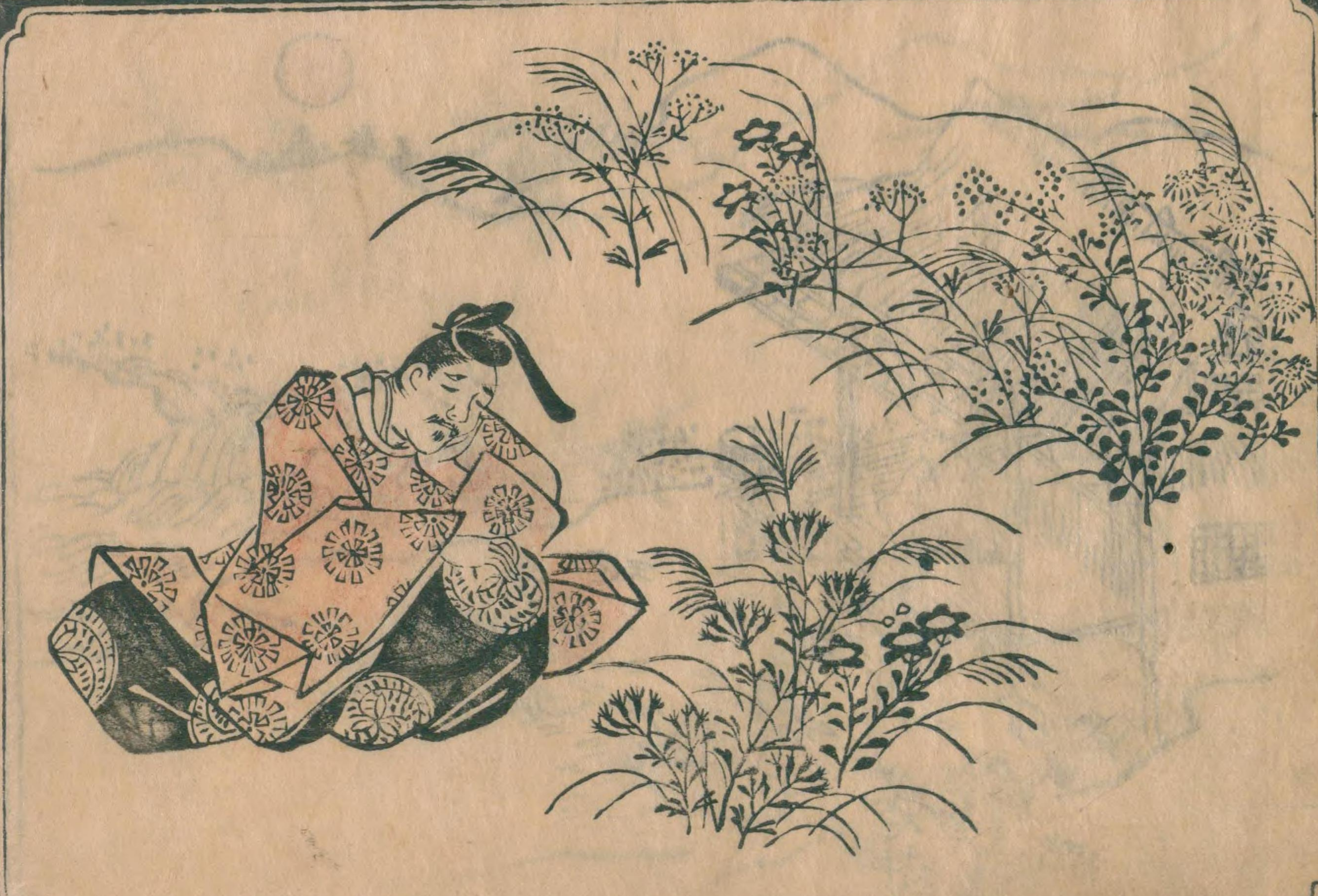
こゝろとはあはれなりあら涙よ人と袖の露むすひて詩ことゝぬ秋のくれはうちこりけく袖をとひかつ又稽（こうかう）みてしかくのこゝろあるへし



秋へよとく露のをかりとおもへぬ
わされの秋乃ゝまれわさしくに
このひとつを枕としてもふけぬよりにこそ
わかれの秋のまことは秋へのさかりは花
の色も世のこゝろもくさ海にくる風情
しみなるれぬそくもえ間にたへれき涙あへり
とつはれかけとみまでひさへつ紀ようなり

花萩の錦をあらすのし
ゆふきの風に
しられのうへり
わすれかぬなり

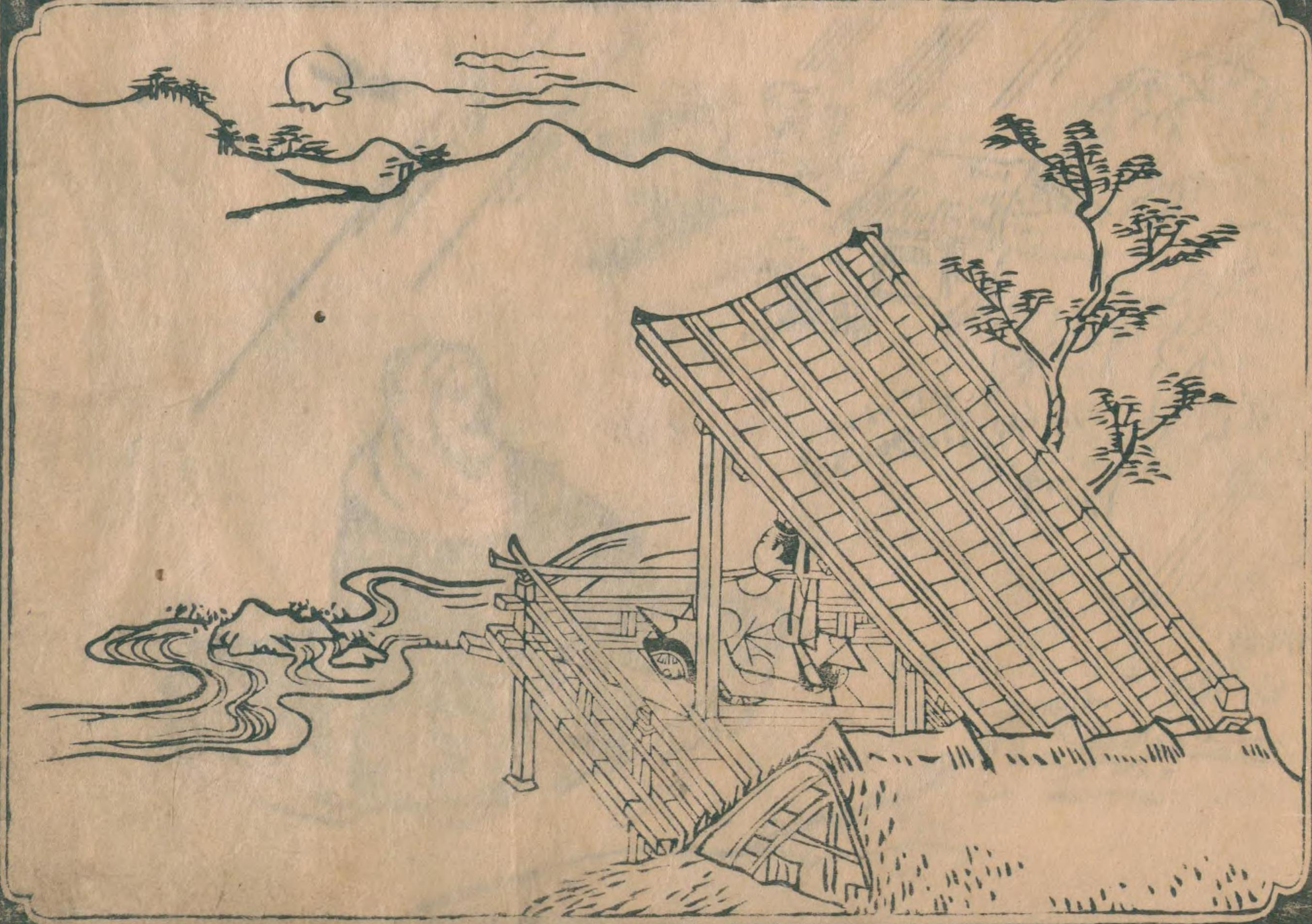
このうたは夜その風に錦をあらすこと
にしられさへよるへくうちとくしものひかり
さとそれもすふもわくらすひとくなすに
らしもそのしられのこゝろにあはれさふり
そひくるをもわしきのふかき紀よしや



しくるゝ袖ゆへいはゝ中あり
はやせよりそれありけの月
ころもあらわりたありそれまてゆく
さひしくさしさうるなり
木の葉ちるしくれや涙に袖に
りうさうすみさのみゆともみな雨く
わうすみざられハわか袖やらうたそのしられ
に涙くらぬとも紅葉の色にもうつるに
よしそ

あさくへしるすはり袖のうすみさに
しのゆてよそのこゝろぬよ

こゝろもあつうすみさしもさく今と
しのふゝみるはわか心うりさにくれその
こゝろゆくこゝろかとるそこゝろもみさの
あらそひくしのふかうとしてねそ
とかく川よりあり



今こんとちきりしことは夢なから
見し夜ににたる有明の月

そのかみちきりしことはかなくなりにしこ
とはゆめなるへけれと月はかはらぬ夜のあら
まほしきよしなり

釈阿（しやくあ）　俊成卿（しゆんぜいきやう）

むかしおもふ草のいほりの夜の雨に
なみたなそへそ山ほとゝきす

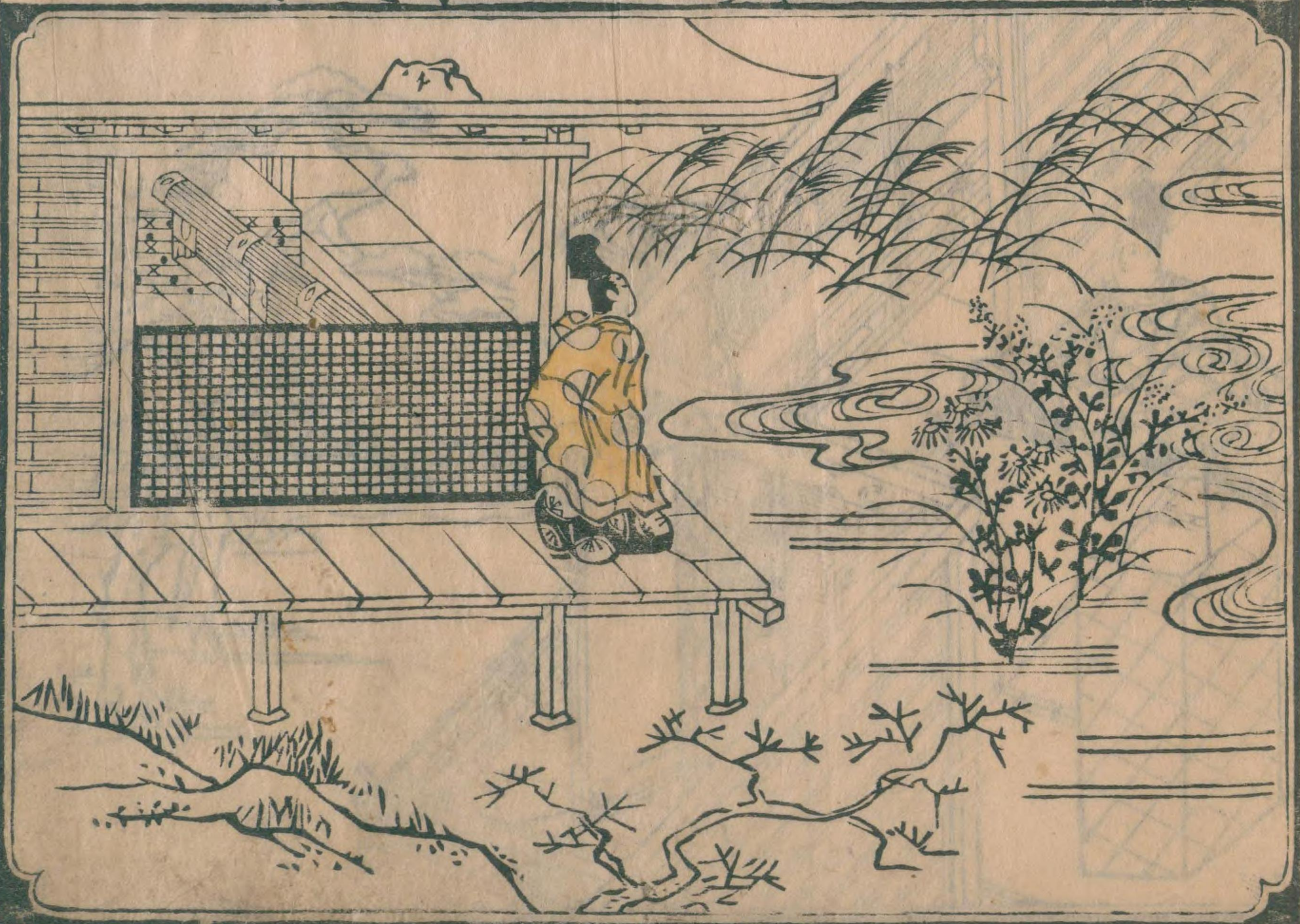
このうたは心おもかはりしをいはりきなかれ
かくへきとよられ哀なる事によく思ひ
のこれかくるすみそろさんのむかしの縁
ますたひのそらにうらひ侍りし山家なれ
ちりはひくことをふとおもひいつそうれ
侍りんたる今りまゝりおほかたの事にそ
ふそしきあれ侍るなからきそんへのころ
あれたいゝくかり又のたまはいけ自讃歌にも
八十さいの時撰家にて八入たといふを後
晩て新勅撰集に入たりけり三十八首

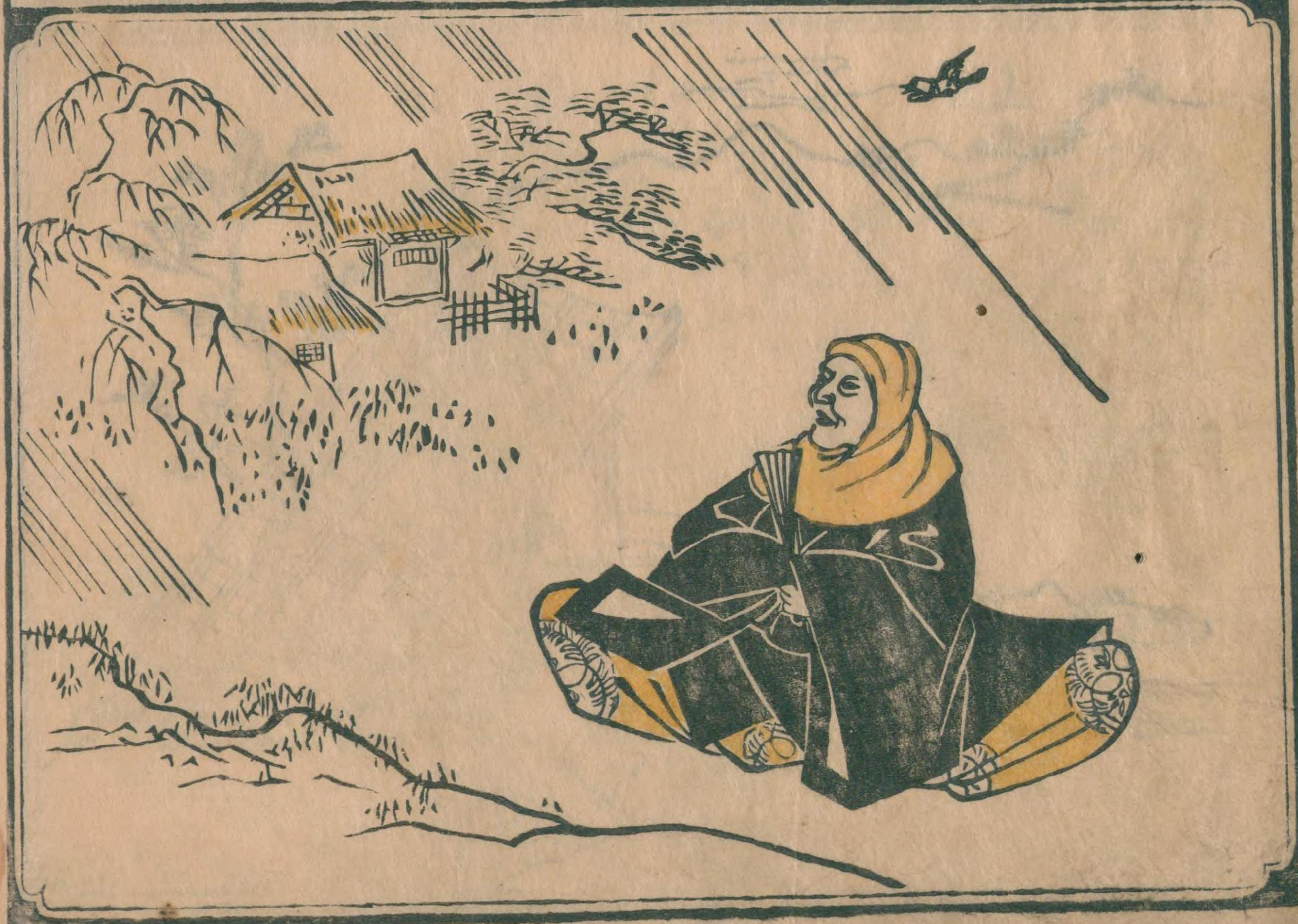
古今集と其後よりおほくせんある御うたの
るかり少屋さんさいにくらへられたるの
こんさんちやかれりくるさんのおもなるほとにん
のうたの侍とよみんしけりからぬてうへきされ
れひけうかそゆめてうみさちなるとよみり

さよふけて（？）

西園寺の月のこゝろあり世に

これらてよみれいれゆうりちかうりておほ
このわれ秋ろうちかれ秋いやせきの月となりの
月ゆりかゝらそれかうるやうへりん
あまり秋のふしゝさそ哀られ
雨うくさゝえかん夕れの夕され
ますてききんとはのひうかんしす
袖のうへへまり濡るゝに二条院のうらと
又涙うかれたかれのいかくへちりて
みくたみなとひさむつし侍りかとこ
袖そみそにかゝそ涙ゆくかへんは
いみくおもりまゝのまなかけらひ侍り
かや



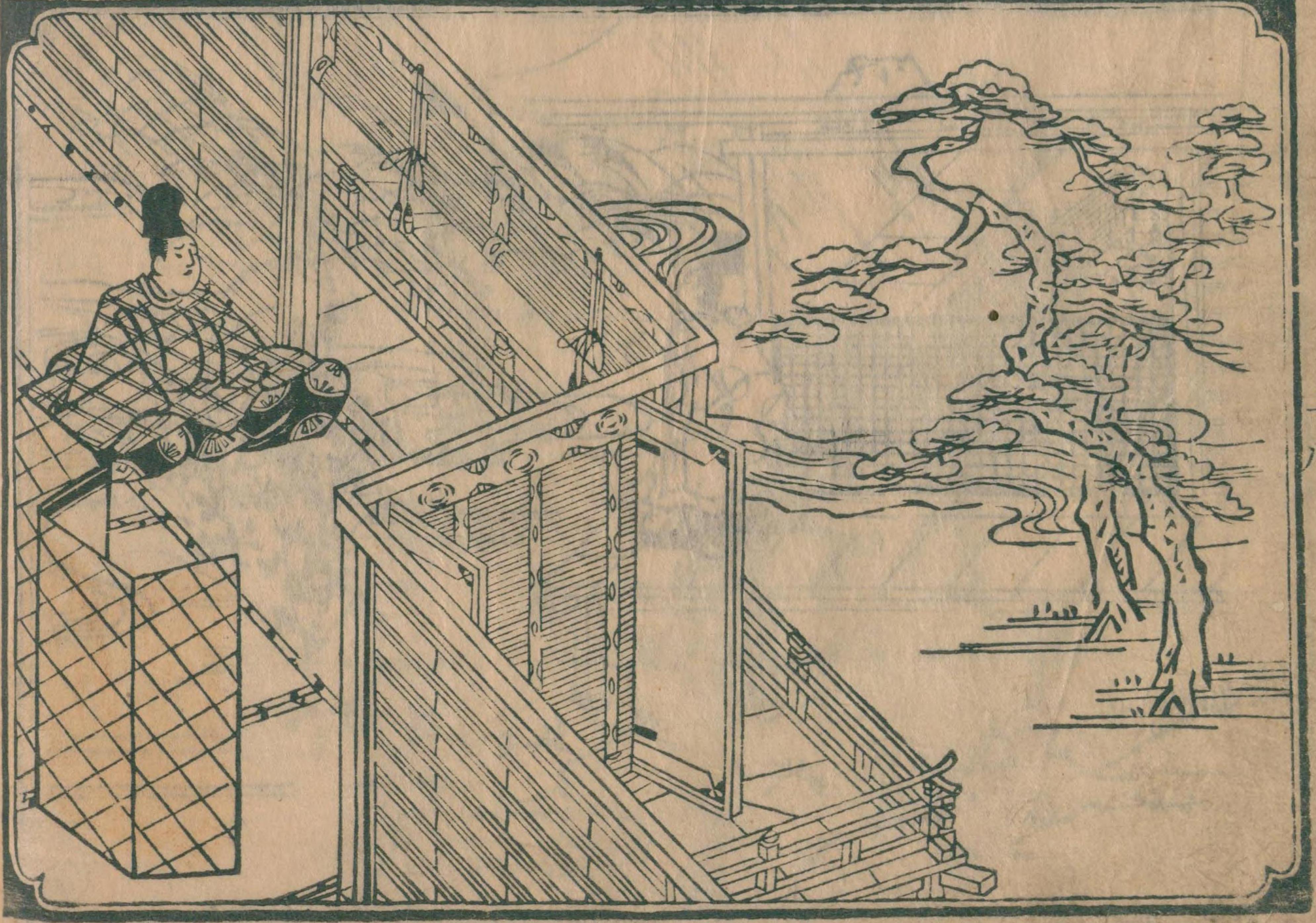


京
193

いかなる神代よりの世中ならん
をみの月日をへてとしころを
そのころはさかりなる世をのが
れてむかしのさかりをおもひくらふ
るや

志あわさて
今そくわりふ秋山れ
よりよりに
松山のすゑ

こゝろえられたることゝ侍るにやたゞ
あくれぬるにさへまてことはするなれ
侍すべきにおもひつゞけしこのうた
うちふし侍るにやおもへは侍り
給ありてぬへし



ガラス使用

東京圖書館藏

ガラス使用